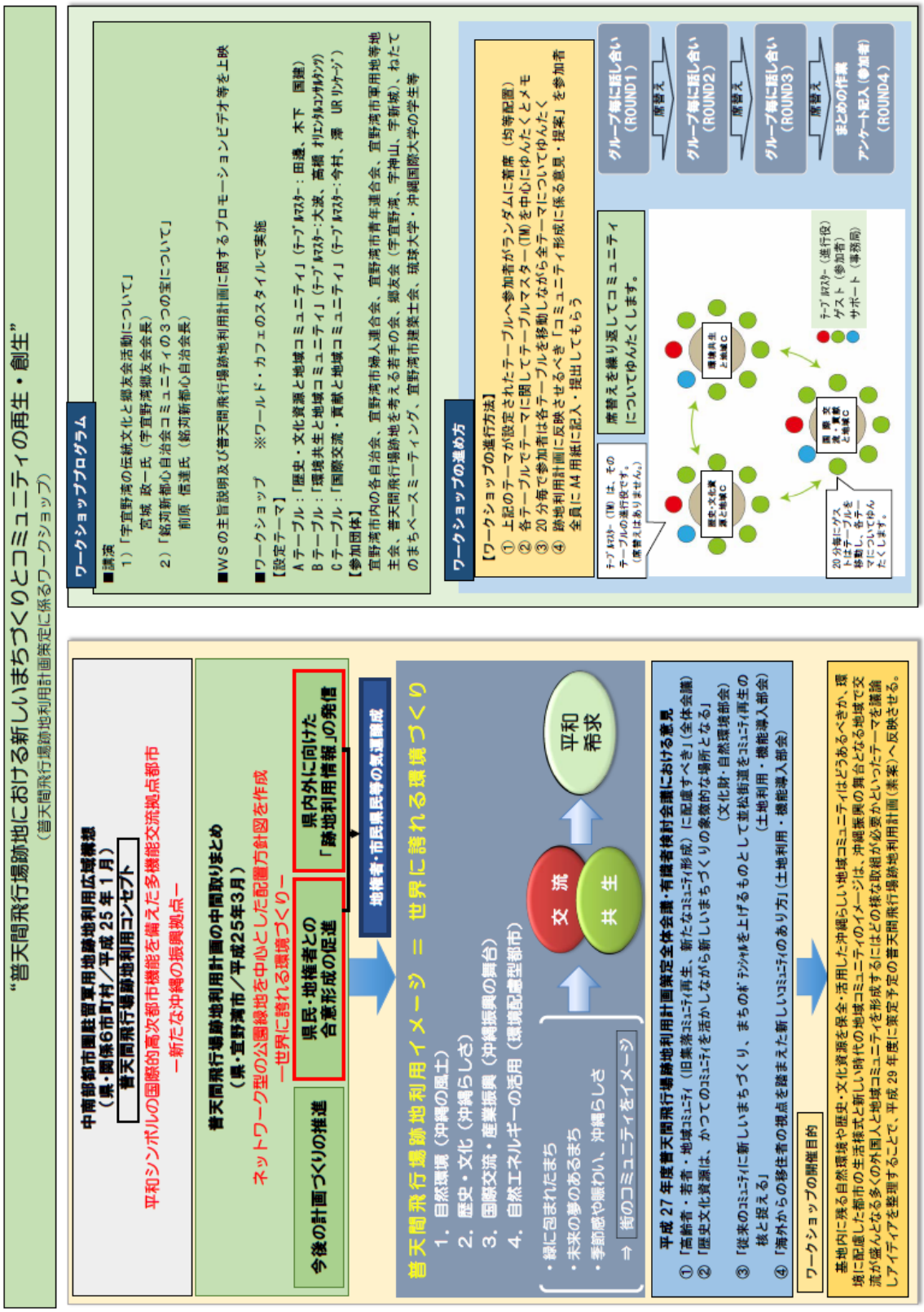
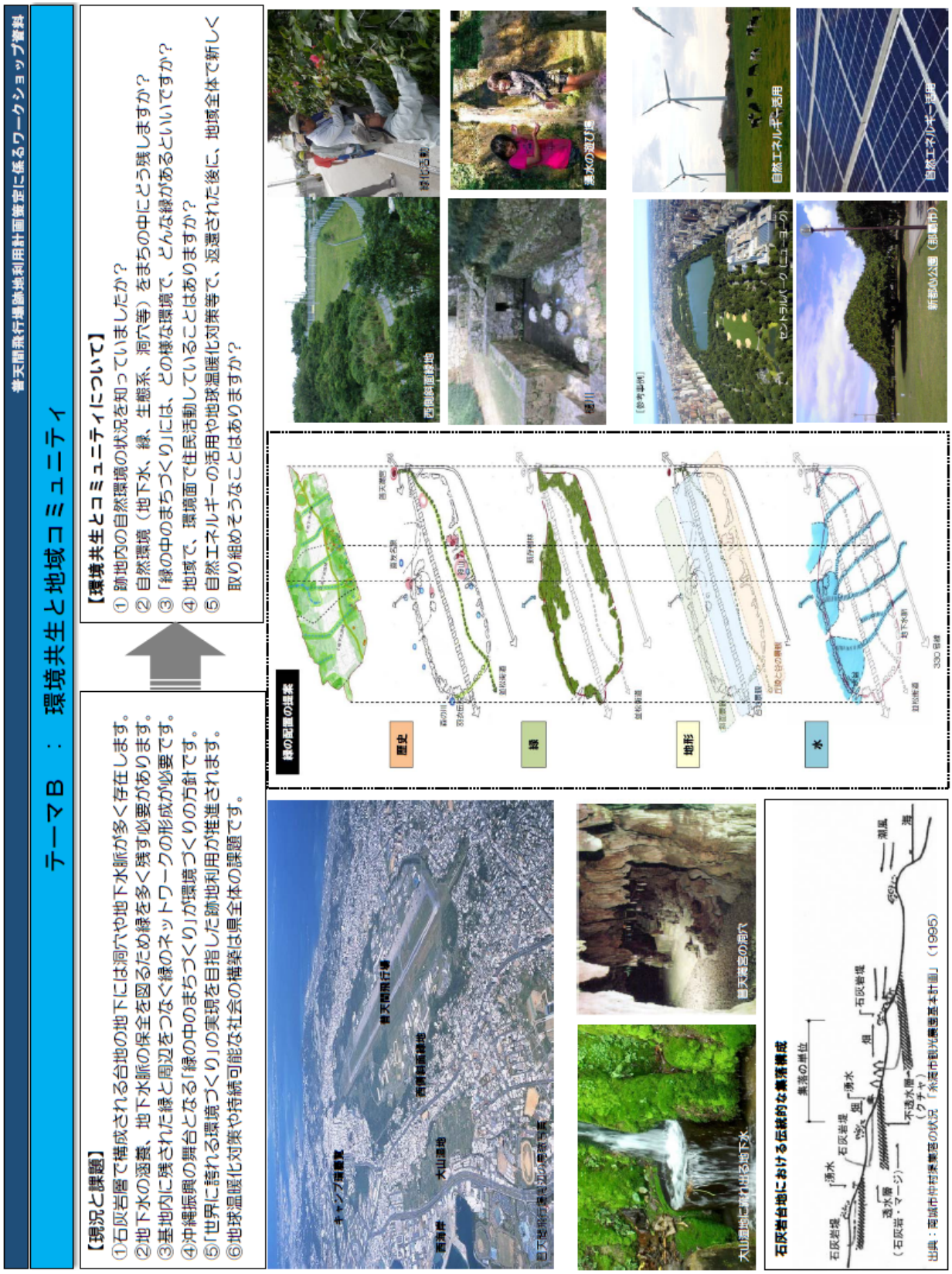
## 2）ワークショップ補助説明資料

### ① ワークショップの開催目的・進め方に関する説明



## ② テーマＡ：歴史・文化資源と地域コミュニティに関する補助説明資料

## ③ テーマＢ：環境共生と地域コミュニティに関する補助説明資料



## ④ テーマＣ：国際交流・貢献と地域コミュニティに関する補助説明資料

普天間飛行場跡地利用計画策定に係るワークショップ資料

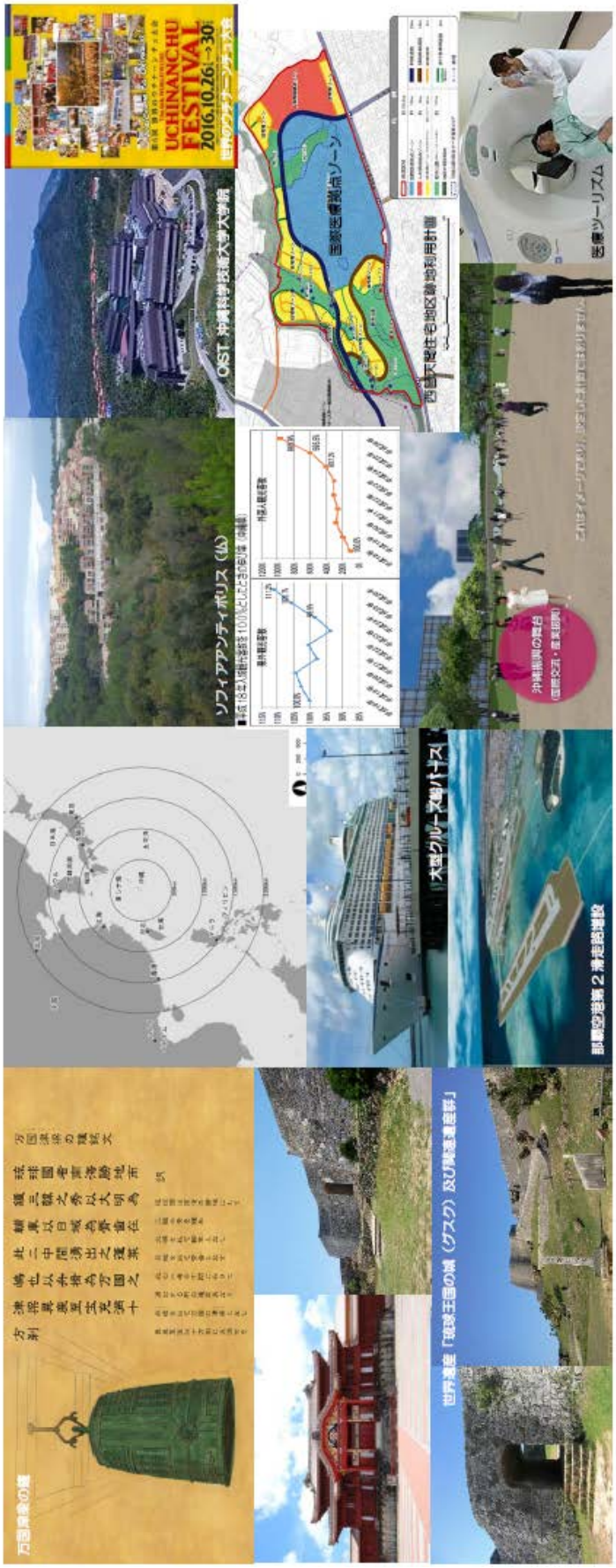
# テーマＣ： 国際交流・貢献と地域コミュニティ

**【現況と課題】**

① 東アジアの中心に位置する沖縄は、琉球王国の時代から日本、中国、東南アジアの架け橋として栄えていました。
② 幹線道路の整備や鉄軌道等の公共交通の整備などにより、空港や港とのアクセスがよくなります。
③ 普天間飛行場跡地利用では、「平和のシンボル」をコンセプトとして掲げています。
④ 跡地には、国際交流の拠点となる大規模な公園や国際的な研究機関の立地が想定されています。
⑤ 西普天間住宅地区には、琉球大学医学部及び附属病院が移転するなど国際医療拠点が形成されます。
⑥ 周遊型観光から体験型・交流型へと観光ニーズが変化するといわれています。（医療ツーリズムやエコツーリズムなどへの期待があります）
⑦ 沖縄の世界遺産や伝統文化は集客力があり、ウチナーンチュのネットワークも世界に拡大し、近年は外国人観光客や外国人移住者も増加傾向にあります。

**【国際交流・貢献と地域コミュニティについて】**

① 交流で栄えたかつての琉球と現在、未来を重ねると普天間飛行場の跡地利用に期待するものは何だと考えますか？
② アクセス性が向上して来訪者が増えるときに、まちづくりで大事なことは何だと考えますか？
③ 跡地にできる大規模公園は、どのように使うと「国際交流の場、平和のシンボル」になると考えますか？
④ 国際医療拠点と連携した医療ツーリズムのために必要なものは何だと考えますか？
⑤ 沖縄の歴史や文化、自然環境に期待して訪れる方のために、自分たちにできること、役割をどのように考えますか？



## （５）ワークショップの様子

▲会場全体の様子①

▲会場全体の様子②

▲お菓子や飲み物の用意

▲各班にランダムに振り分け

▲いろんな世代の人たちが各テーブルに

▲宮城政一さんの講演の様子①

▲宮城政一さんの講演の様子②

▲前原信達さんの講演の様子①

▲前原信達さんの講演の様子②

▲VR 上映の様子

▲各テーブルのテーマとルール説明

テーマA：歴史・文化資源とコミュニティーのテーブル風景

▲自己紹介などのアイスブレイク(A-1)

▲多世代での議論（A-2）

▲参加者の熱心な議論(A-1)

▲参加者の熱心な議論(A-2)

テーマB：環境共生と地域コミュニティのテーブル風景

▲各々のテーマに合わせて議論(B-1)

▲地図などを使いながら議論（B-2）

▲参加者の熱心な議論(B-1)

▲資料を交えながらの議論（B-2）

テーマC：国際交流・貢献と地域コミュニティのテーブル風景

▲思い思いの議論を交わす（C-1）

▲各々のテーマに合わせて議論(C-2)

▲真剣に聞き入る参加者たち（C-1）

▲参加者の意見を引き出すテーブルマスター(C-2)

▲最初のカフェに戻り、まとめを行う①

▲最初のカフェに戻り、まとめを行う②

▲テーブルマスターの意見とりまとめ作業

▲テーブルマスターによるまとめ（テーマA）

▲テーブルマスターによるまとめ（テーマB）

▲テーブルマスターによるまとめ（テーマC）

▲上江洲先生の講評

## （６）テーマ別ワークシートのまとめ

### １）テーマＡ：歴史・文化資源と地位コミュニティ

#### ① 拝所・文化財の保存・活用について

- 拝みは自治会や地域がつないでいく。
- 各地域の文化遺産は保全し活用する。
- ただ保全するだけでなく、地域と話し保全する意味を考える。
- 基地内での拝所清掃に子、孫を参加。
- 失われた拝所・遺跡の復元を。
- その場所に残してもらいたい。
- 歴史・文化を感じる場所をつくってもらいたい。
- 土帝君・御嶽は沖縄独自の文化。観光資源にもなる。
- 御嶽は地域の大事なもの。観光客は来なくても良い。
- 文化財は保全だけでは駄目！活用が重要である。
- 新しいまちづくりのための文化財の取り扱いを考えるべき。
- 観光と文化財の両立。
- 拝所・文化財の周りはあったまちなみを。上にビルでは合わない。
- 森の川　駐車場確保で観光資源になる。
- 文化財を「パワースポット」としてＰＲ
- 文化財があるところに説明の中で、なぜこの文化財が必要なのか示す必要がある。
- 泉・カーを中心に公園・緑地に。
- 泉・カー等公園と一緒になって残していく。
- 歴史文化的資源の保全活用について①歴史ロードの整備　②伝統文化保全に向け、各区への保存作業を市主導型で。
- 拝所、聖地として星が見えるような場に。
- 文化資源巡り、観光コースに入れる。
- 歴史・文化を巡る遊歩道の整備
- 松並木・拝所、気楽に入れるｃａｆｅ、公園等

#### ② 並松街道について

- 松並木を全体計画の中でうまく取り入れて欲しい。
- 次の世代に残す（並松街道）。
- 松に導かれて目的地へ行ける。木陰がつづく。
- 馬を通す土の道（の並松）
- 既存の自然を利用しても良いのでは（並松の再現）
- 並松は復元が望ましい！
- 皇居みたいな松の森をつくる。安心して遊べる。
- フェンス沿い緑地部分に並松街道をつくる。
- 公園と一体化した並松。
- 公園と一体化し、シンボルとなる並松を再現。

- 見たことはないが再生したら良い。新しいシンボル（並松）。
- 時代の流れを表す場所（並松）。
- 車の通らない並松街道。
- （並松は）歩道のみ！車はＮＯ！
- 宜野湾周辺に並松みたいに散歩コースがあれば。
- 【提案】並松を“まち”のシンボル化
- 跡地に必ずつくる必要はない。
- 交通事情も考えるべき（並松街道）
- 松を市民と植える！！一人一本！！
- どこから松を持ってくる？
- 10 年、20 年かけて育てる。
- 100 年後の並松を育てる！
- 【ヒント】クロキを植えて 100 年後に三線。
- 植樹を通してコミュニケーション
- 市民公園で苗を育て、まちづくりの時に植える。
- Ｍｙ松!!
- マツヤニが出てくる街路樹。根が張る。工夫が必要。

**③ 洞穴やガマについて**

- 東側のフェンス付近の洞窟は守る必要あり。
- 水・洞窟・カー・文化遺跡ともセット。
- 洞窟呑み口は残すこと。
- ガマ・水　遊び場とすることで大事にする。
- 陣地壕も遊び場に活用。
- ガマを利用した遊びの場を整備！！
- 洞窟探検ツアー（資源化）
- 洞窟を観光・教育に活かす。
- 小中学校の教育に活かしてほしい（平和学習）。
- 無駄な照明はつくらないように！
- 壕の保存+観光+公園
- 洞窟・自然をアートに。
- 戦争遺構も残すべき（整備）！！教育・学習。

**④ ウマイー（馬場）**

- ウマイー県下最大。活かす！
- ウマハラシー
- 馬はらし復活。

### ⑤ コミュニケーションの場・交流の場について

- 自由度の高いコミュニケーションの場を。
- 若者とおじーおばーが関われる場所。伝統文化継承（三線・舞踊 etc）教室つくるとか。
- エイサー・ＰＴＣＡで関わり
- 目に見えない文化をＰＴＣＡを通して継承していく！！
- 若者、高齢者、楽しんで集まる。
- 食文化も文化資源。食文化（長寿食）を体験できる。
- イベント広場。沖縄らしさを残し食文化を体験できる。
- 宜野湾市各地域の特性があるイベントの開催
- イベントが開催できる広場が必要。

### ⑥ 人材育成について

- 小中学生に地域学習機会を→将来の人づくり
- 後世に残すため、子供たちの人材育成。
- 学生ＷＳ（中学生）
- 人が壊す。それでいいのか…。学習することで行動になる。
- 平和学習できる施設が必要。
- ガイド養成（歴史文化を巡る）
- 地域ガイド養成し、エイサーを見れる。

### ⑦ その他まちづくりについて

- 高い建物は相応しくない！！
- 低層の住宅→まちづくり。
- 基地内の資源。低い建物のまち。月が美しい。
- 基地ゆえに残った資源＝自然林
- 現在、残っている緑地の保全は重要と考える。
- 時代にあわせた土地利用を検討すべき。
- 沖縄№1 の公園づくり
- かつての“まち”を復元してほしい！
- 観光客は気にしないほうが良い。いいまちには「人」が集まる。
- 返還前にまちづくり計画を決める必要が有！！
- 照明の無い、星が楽しめる場所をつくってほしい。
- 宜野湾市ならではの基地のまちづくりの知恵を活かす。
- 色々な意見を聞いて、全体の計画を考える必要有り。
- 基地周囲には野鳥がたくさん。
- 隣近所であいさつ→輪が広がる
- 世界の人々が集まる地域。
- エイサーサミット。各地域だけでなく交流。
- カデナカーニバルのように市民が見る機会を。

- 医療ツーリズム→もてなし。食文化。
- 伝統建築（赤瓦）などの活用。
- 風景づくり。かやぶき、赤瓦、バランスが必要。
- 琉球が感じられる（タイムスリップした）石垣。
- 沖縄らしい樹木の配置等も考える必要がある。

### 2）テーマＢ：環境共生とコミュニティ

#### ① 基地内及び周辺自然環境等に関する現状認識

- 知らないが知りたい
- 入れる場所が限られる
- 基地内だから知りようがないが知人から聞いたことはある
- 屋敷林跡（旧集落）で畑をやっていた。
- 東側は手つかずの状態で残っている（神山）
- 起伏が激しい崖になっている
- 地下水が大雨の際にガマに集中する
- 大山で海水浴（約 60 年前）神山→伊佐を横断していた。
- 聖域であり、生活の場。
- ウフガー洗タリ（年一回入れる行事）
- 沖国北側のウフガー、うがみ、洗濯、泉
- うがみ、水源→大山へ
- 湧水あり。
- 生活に活用。
- うがんじゅが多くある。
- 大謝名　お墓ある（入れる）。

#### ② 自然環境等をどのように保全・活用するのか

- 文化財の情報など跡地利用につなげる。
- 東側は緑が残っている（貴重な緑）。→残してほしい。
- 住宅地と自然の共存。水や緑を残すような用途地域にする。
- 玉泉洞よりも大きな資源となる？
- 宜野湾に自生する元からある植物を活かすとよい。
- テーマパークなどで洞穴を有効活用した体験型の観光促進。
- 東側の昔ながらの地形→規制をかけて人のための道を。
- 地下水を枯らさない（現在、活用している）。
- 集落にポンプアップして雑用水や生コン・サウナなどへの販売など。
- 大きな建物などにより水を枯らさない（規制など）。
- 緑はいっぱい残っている。
- 森→公園。木が少なくなった。
- 緑は残す方がいい。

- 極力、緑を残す。
- 自然らしさの考え。
- 水脈と建物の関係。
- 川節に泉があつまっている。
- 水路と緑は一体として残す。並松街道→セット。

**③ 将来、どのようなまちづくりをしていくべきか**

- 想像もしないまち、人が住みやすいまちになって欲しい。
- 沖縄の良さが伝わるようなまちづくりを徹底的に行う。
- 緑が公園などできれいに育成できると良い。
- 緑と水を生かした公園づくり
- 沖縄らしい場所をつくることのできる唯一のチャンス。
- 並松を復元して緑と共生するようなまちづくり
- スポット的に緑、人が集まるところをつくる。つなぐ。
- 県花など沖縄特有の植物があると良い。
- 周辺の密集した市街地、コミュニティを含めたまちの再編と発展。
- 自然を生かしたまちづくりを皆でやっていきたい。
- 沖縄の中心として平和を発信するまち。他にないもの（北谷・新都心）。
- 豊かな地形と緑（東側）→湧水にも良い影響
- 田んぼが残っているのは大山のみ→残す計画としてほしい。
- 空洞に地下水がいっぱい流れている。
- 窪地、地形などを活かしてまとまった緑を残して欲しい。
- 基地の跡としての遊歩道づくり。
- 人が集まれる公園（木がいっぱい）。
- いこいのパーク。
- 大きい広場→誰でも使える。
- まとまった大きい公園。
- 多世代集まる。
- 母さんが集まれる場。
- 自由に遊べる広場
- 勉強しながら図書館
- 図書館（森の中）
- 森カフェ
- 市民図書館
- 緑がある心が安らぐ
- 鳥の鳴き声で起きる
- 野鳥が集まれる。
- 緑と一緒に暮らす。
- 江東区近くに家庭菜園。

**④ 住民活動について**

- 郷友会でカー清掃している（年１回+α）
- 空地を活用した花植え運動（→コミュニティの活性化）
- ボランティアサークルで清掃活動
- 交差点毎リーダー
- 自治会・通りごとの清掃

**⑤ 自然エネルギーの活用・環境共生のまちづくりについて**

- 季節風のエネルギーの活用（風の通り道をつくる）
- 地形・地質の現状（戦前・戦後での変化）をしっかりと調査して計画に反映。
- 環境と観光の共生　若者の仕事をつくる。
- 地勢を活かした自然エネルギー。
- 観光としてもＬＲＴ・鉄軌道を促進。
- 車に乗らない社会（公共交通を利用）。
- 湧水を活かした環境学習
- 水の流れ、ホタル
- 住宅ごとに緑化率決める。
- 大山の湧水への配慮。
- 市内で環境学習の受け入れ先ない。

**3）テーマＣ：国際交流・貢献と地域コミュニティ**

**① 人材育成について**

- 人材育成が何よりも大事（観光協会の人材　中国への留学）
- 通訳・案内役の充実（人材育成）
- 英語が話せるようなまちづくり（外国人との交流）
- 国際色豊かな土地柄の活用（外国人との共存）
- 頭脳（科学技術等）を育てる環境づくり
- 留学生が活躍できる環境づくり
- 大学生の活用による環境整備
- 言語（ことば）が重要。文化・歴史の理解につながる。コミュニケーション。
- 英語を誰でも話せる教育が大事！
- 英語しか使えないゾーンをつくる。
- 言語教育（色々な言語）のための地域サークルの活動の場を設けてほしい。
- 沖縄の方言を伝えることも大事だが、英語も大事。
- 言語は習っても常に使う場所も必要。部分的に英語しか使えない場所をつくることも必要
- 英語のカリキュラムを変えないと駄目！

**② 交通機能の充実について**

- 交通の充実による交流促進

- 公共交通（鉄軌道）の整備
- 渋滞の解消→公共交通の充実
- 幹線道路・駐車場の確保

**③ 沖縄らしさについて**

- 伝統的景観の公共施設や住まいの整備
- 沖縄らしさ、赤瓦の風景、重箱料理体験
- 沖縄の文化を体験できる
- 体験型（歴史文化）イベント
- 昔の建物・産業（サトウキビ）の再生
- 自然・集落景観の保全
- 沖縄の自然環境の活用
- 嘉数公園や洞穴等資源の活用
- あえて国際交流のために用意するのではなく、ありのままの文化・歴史を見聞きしていただくべき。
- 沖縄らしい赤瓦家屋が無い。もっと残す努力が必要。

**④ 食文化について**

- 古民家でのリーズナブルな郷土料理（沖縄そば・チャンプルー）
- 日本食（郷土料理）中心の飲食
- 外国人が日常的に食べるものも必要
- 重箱料理体験

**⑤ イベントや交流空間について**

- 新住民（外国人含む）のとコミュニティ形成が課題
- いろいろな国の人が交流できる場所
- 地域コミュニティの核となるような公園
- 公園+保育+高齢者＝世代間交流ができるまち
- 大規模公園を核とした交流
- イベントができる公共空間
- 緑（自然・森）を活かした拠り所
- シンボルとなる施設
- ディズニーランドのようなテーマパーク
- カジノによる集客
- 人と交流、文化・歴史体験ができることで外国の方をもてなせる環境づくり
- まちぐわー（公設市場）は交流・体験型の観光にシフトしてきている。ハードよりもソフト的な対応が大事。
- 文化・風土・歴史を大事にしたコミュニティづくりが世界交流受け入れにもつながる
- 世界的なスポーツ合宿の拠点として
- 空手ネットワークの活用（武道館等）
- ウチナンチュ大会の誘致

- イベント（世界的フェスティバル）を開催するような取り組み、空間が必要。「世界のウチナンチュ大会」のようなもの
- お祭りには人を呼び込む魅力がある。仕掛けとして重要。
- 祭りの出演者となり得る人材育成（個人・組織）
- 外国居住者（市内に住む）の活用を！
- 音楽、動物は世界共通。世界が一つになれるテーマ性が必要か。

**⑥ その他**

- アジアの懸け橋となるまちづくり
- 那覇から北部間の立ち寄りしたくなるまち
- 平たい・住みたいまち
- 早めの準備が必要
- 返還を踏まえた国際環境整備のプログラム
- 並松を中心とした緑の整備
- 並松街道は人を中心とした整備
- 医療機関（急病に安心できる環境）
- 外国人のためのホテル・飲食の充実
- アワセ（イオンモール）のような外国人を呼べる施設
- 「アジア」安心感を感じる。沖縄に来られる方に安心感を提供できれば…。
- 沖縄が平和なら、世界が平和になる。
- 宜野湾にはホテルが少ない。船での来客が増えていることもあり、集客力のある宿泊機能がいる。

## （7）ワークショップ講評

上江洲純子准教授（沖縄国際大学）

皆さんこんにちは、沖縄国際大学地域行政学科の上江洲といいます。皆さんが限られた時間の中ではありますけれども、生き生きと議論されている様子を周りで、楽しく、拝見、拝聴させていただきました。本来であれば、私もどこかのテーブルに参加したかったのですが、今日、講評という役割を仰せ付かったので、各テーブル、それぞれまんべんなく周って、皆様のお話しにちょっとずつ耳を傾けながら過ごしていた次第です。本日は、沖縄国際大学の地域行政学科の学生も複数参加をしております。学生たちにもこのような機会を与えて下さってありがとうございました。簡単ではありますけれども、講評ということですので、今日の振り返りというのをしてみたいと思います。

このワークショップ、実は初めての試みなので、次につながるかどうかというのが、まず一つ。私自身は、まず二つの成果があるのではないかと見守っていました。一つは、テーブルを見回してみてください。多世代というキーワードが先ほども出ましたけれども、多世代の方々が同じテーマについて、こんなに熱く語り合える、こういう多世代の交流が実現したこと。そしてもう一つは、各テーブルの皆さんを周って聞いていると必ず「過去」、昔、普天間はどうだったというお話。普天間基地のこの辺りは、どうだったよ、という昔の記憶の確認、そして検証というのが各テーブル行われていました。さらにそのあと、「今」、どういうことが問題になっている。そして、「今」何ができるのか、という現在のことの話を各テーブル、話をされていました。そしてさらに、もちろんこのワークショップのテーマである、今後、新しいコミュニティをどうすべきかという、そういう話につながる「未来」の話。「過去」、「現在」、「未来」の話というのを皆さん知らず知らずのうちにされて、テーブルマスターの技術かも知れませんけれども、さすがだなと思いながら聞いておりました。この二つの成果が、このワークショップの２回目が開かれるかどうかの試金石になるかなと思っています。

そして、今回、3つのテーマが指定されていましたけれども、まず、最初のAテーブル。Aテーブルの歴史・文化というお話。ここでは、本当に色々な文化・歴史の掘り起こしという話が、地域の先輩方からお話をされて、若者たちにその知識というのが継承されていく様子が見て取れました。そして地域資源の中でも、よくキーワードとして出ていたのが、「並松街道」です。これに関しては、これから取り組みを始めようというような、「現在」の、そして「未来」につなげていこうというような話も出ていました。非常に参考になる提言が色々出ていたかと思います。

そしてBのテーブルでは環境共生。これはおそらく、いろいろな方が、いろいろな目線で話ができるテーマだったのかなと、活発に意見が出ていたテーマだったかと思います。環境というと、今、緑が残っている地域としては、宜野湾では普天間の広大な基地の中に緑が残っているというのは航空写真からも明らかですね。そしてこの環境共生という取り組みの中で、基地の中の自然というのを活かせないかというお話が

各テーブルで出ていたのを印象的に覚えています。なので、基地の中の緑というのが、今後、どう活かされていくのかというのは、これから先、環境共生を考える上でも、非常に重要なことだと思います。そして「水」というキーワード。やはり宜野湾は水のまちですので、湧水についてコメントされる方がたくさんいらっしゃいました。さらに今回、あまり出てこないなと思っていたところに、「風」というキーワードも出てきました。高台にありますから、風というのは、やはり、キーワードの一つになるのではないかと思って聞いていたので、これから先は「緑」、「水」そして「風」、もちろん「太陽」も含めてですね、これを未来の環境共生のまちに活かせないか、そういうことが提言として参考になるかと思います。

そして、最後にC、国際交流というテーマ。実は私、3つのテーマのうちで、一番難しいテーマだと感じていました。テーブルマスターの方も苦労されたのではないかと思いますけれど、とっかかりとして、それぞれの交流体験を聞き出すというところから始めたり、色々、工夫をされていたのを覚えています。この国際交流のまとめのところで出てきた話というのは、実はA、B、各テーブルの歴史や文化、環境というのを活かした交流を実現しましょうというような、CがAとBをつないで、まとめる役割を実は、果たしているんだというのを、今日のテーブルマスターの報告を聞いていて感じたので、これからコミュニティというのを交流をキーワードにつくっていく時には、そこには交流と言いつつも、A、Bでテーマになった歴史・文化、それから環境というのが、必ず、大事なキーワードとして入ってくると感じています。今回は、20分、20分、20分ということでみんなが慌ただしく移動していたのを見ていて、まだまだ話したりないのだろうなと感じましたから、もちろん、ここで終わらせることはもったいないことだと思います。是非、ここで話せなかった人、今日、聞いた話、感じた事、そして話し足りなかったことを、お家に帰ってから、家の人、子供たち、そして友達に話すという事を、是非、実現してほしいなと感じています。

つたない講評となりましたけれども、今日のワークショップへの参加というのが、皆さんにとって、一つの経験値となれば、私もうれしく思います。ありがとうございました。

## （８）アンケート結果まとめ

### １）歴史・文化資源と地域コミュニティについて

#### ①地域での保全・活用及び地域性に関する意見

- 歴史・文化資源の活用は他地域との魅力の差別化につながる大きな要素だと思います。ただし、安易に保存するのではなく（モニュメントの設置や説明板の設置のみなど）、その文化資源をいかに活用してもらうか、また、地域の方々のより所として大切に保全してもらえるか。
- 歴史・文化資源を復元、活用して、芸能・行事を地域全体で行うことが大事。
- 地域住民や利用者となる人々への働きかけをセットで考えてほしいです。街の中で活かされる文化資源、地域の人々が受け継いでいく文化資源となって欲しいです。
- 地域性を活かしつつ、市としてのあるいは県としての統一した文化（エイサーとか）を形成する。
- 宜野湾市独特の文化や伝統を残す→宜野湾市ならではのものを（高い建物をなくす、低い建物を多く）

#### ②歴史・文化の学習・継承に関する意見

- 洞くつやガマなどの自然物は歴史学習などに使用する。
- 世界や日本よりもまずは身近な歴史を知るべき。
- 沖縄の文化・歴史を次世代にもつなげて行くために、三線、舞踊、エイサーなどが学べるような教室があってほしい。
- 宜野湾市の歴史・文化資源をひとつにまとめた資料館をつくる。
- 現存している文化資源を傷つけることなく、そのままの形で今後残して行くためにも、多くの人にその歴史を知ってもらい、保全していくべきだと思います。
- 現在残っている文化財やカー等の役割や必要性が伝えていく為に、学習を強化する必要がある。沖縄独自の価値観で考えていくことが大切ではないか。
- 小学校など、学校施設と連携し、小さいころから文化、伝統にふれる機会を多くしていく。
- 宜野湾にはいくつかの大学があるので、そこの大学へ通う学生にも宜野湾市の歴史や文化を伝えきれたらいいなと思った。
- 普天間飛行場があったことを忘れない様なシンボルをつくる（一部に）
- 人材の育成をして、継続性を高める。
- 歴史・文化資源を残していく人材づくり。
- 大事な歴史を伝え、次世代が頑張れるつながりの場所づくり。
- 日本・沖縄の良さを伝えられる所があったらいいなぁと思います。
- しっかり次世代に継承していくための活動を個人だけでなく、自治会を通して行い、伝えていかなければならない。なぜこのような文化が沖縄にあるのか、その意味や役割も教えていく必要がある。
- 歴史をそのままにしてはいけない。誰かが次の世代に残して行かないといけない。

沖縄の貴重な資源の保存行為。

**③観光資源としての活用に関する意見**

- 基地内に残っている文化資源を保存する、そこで観光化していく。
- 昔ながらの地域の生活様式を再現し、観光化していく。
- 洞穴等観光化した公園、花木を植える。
- 琉球にタイムスリップしたような町になってほしい。沖縄の独特さが薄れている中に、琉球を感じられる空間をつくってほしい（石畳、赤瓦、etc...）

**④コミュニティづくりに関する意見**

- 現在残っている文化資源を活用したコミュニティづくり。
- 若者とおばーおじー世代の交流もできる（若者は情報が少ないから、分かりやすい一定地域にいろんな文化に触れる場所があると嬉しい）

**⑤自然に関する意見**

- 自然をなるべく残して町づくりと調和をはかる。
- 文化財を残しながら都市開発をする。星の見えるまちづくり。
- 歴史遺産や文化財等とからめて、星の楽しめる空間がつくれるはず。そういう場所は、自治会などが大事にするし、子ども達にも伝え続けることができそうだ。広大な土地の中にわずかでもそういう場所を確保したならばよいなぁ。今は宜野湾市の中で星の見えるところは皆無に等しい。基地の中はどうか？

**⑥並松街道に関する意見**

- 並松街道の復元は良。しかし、跡地にそのまま復元ではなく、一部でも構わない。
- 戦前の通り（なんまち）を思わせるもの。戦後の基地のあったまちを思わせるもの。それぞれが残され、活かされるまちであってほしい。
- 南北にじのーん並松街道をつくり、健康街道をつくる（ウォーキングコース）
- 宜野湾市のシンボルだった松並木（ナンマチ）は、ぜひ、何らかの形で復元したい。これが宜野湾市だという形がほしい。ただの街になってほしくない。

**⑦公園整備に関する意見**

- 集落跡を残しつつ、大きな公園を作ってほしい。
- カー等御願所を含むように大きな公園、散策道ができるといいと思います。
- 沖縄の昔等、食料理等も紹介できる大公園の中で施設等を考えてほしい。

**⑧資源の復元に関する意見**

- なくなった文化財の復元。
- 文化財の復元、中心にしたテーマパーク（パワーポイント）

**⑨今後の課題に関する意見**

- 歴史文化資源は大事にし、開発に際しては充分考慮すること。
- 各字（自治会）から歴史・文化等に残したいという願望はたくさんあると思うが、かぎりある面積をどう計画するのがネックになると思う。

**⑩その他意見**

- 洞穴の利用、松。
- 子ども達に地域の歴史・文化に誇れる地域をつくる。
- 文化資源を活用したまちづくりに反映してほしい。
- 食文化、空手など。
- 残したいと思う人は多いと思う。今生きている人、生活している人たちと共生できる残し方、地域や学校と協力して残すやり方が大事。
- 文化財のある地域に大きな駐車場をつくって、車の乗り降りの便をよくする。
- 地域の方も観光客にも街歩きのしやすいコースづくり。
- 広場を利用してのイベントを世界規模で行う（エイサー、カチャーシー大会）
- 史跡など保存するだけでなく、アート、子ども達が遊べる場としての活用。
- まだまだ未調査の軒地洞跡の整備が必要。
- 宜野湾区の産泉や闘牛跡地等をぜひ残してほしい。
- 宜野湾郷友会のジオラマの展示場所。
- 美観地区（赤瓦など）の設定。

**２）環境共生と地域コミュニティについて**

**①自然環境の保全・活用に関する意見**

- とってつけたような自然ではなく、地域に本来からあるような、自生しているものを活用した自然環境をつくり、保全してほしい。
- 地下水に考慮した開発。自然をつくるのではなく、残す。
- 地形をそのまま残す場所を決めておくことが大切だと思う（湧水や植栽につながる）
- 木や緑など残しながら基地跡の有効利用をしてほしい。
- 基地があったので、自然の森や木などがあった。その残った森など変えずに、人が集まる場所であってほしい。
- 利便性だけを求めるのは良くなく、環境保全が大事。
- 水資の確保できるコミュニティ。
- 水を枯らさない。
- 戦前からある自然を残して行くために、用途地域を特別に設けて、守る必要がある。
- 普天間跡地には、湧水も流れているとのことなので、ホタルなどを観光資源かつ環境資源として残せないかなと思いました。
- 貴重な自然を残していかないといけない。
- 那覇新都心や美浜とは違い、自然等を残すことが必要ではないか。
- 基地内に多くの自然が残っているので、それを壊さない様なまちづくりが大切だと思った。
- 基地の中に豊かな自然が残されており、大事にされなければならない。どんな大事な自然か？を調査することはとても大事で、大事さが認識されない限り残す意

味はうすい。
- 宜野湾市にもともとあった自然を活かす。（北部、中部、南部それぞれに独自の自然やそこで暮らす生物がいる）
- 自然文化を上手く利用する。
- 自然を活かし、沖縄らしさを残し、世界から注目されるようにしてほしい。

**②緑地・緑化に関する意見**

- 緑地の確保（水源）
- いかに緑地帯を残すか。
- 自然の緑を壊さないで、生活や暮らしの中に緑、菜園（野菜や花を植える）。
- 既存の緑地の保全。
- 現在、飛行場内にある緑を大切にし、開発する。
- 現在残されている緑を活用して街づくりをした方が良い。普天間飛行場には緑や水源がある。
- VR では、ホウオウボクの活用というものもあったが、那覇では数年に一度虫が大量発生し、枝の大規模な伐採が行われている。そういった事態も考慮して樹木の選定をしてほしい。

**③環境共生に関する意見**

- 現在ある環境と地域で、時代に合った環境を考える。
- 自然体の田、畑等を環境共生とどう位置するのが課題だと思う。
- 自然の現状把握によって、よりよい環境共生が可能。
- 丘から崖を抜け、海浜に潮干狩りに行っていたという人がいたが、自然との生活と密着できる空間を作ってほしい。
- 建築物をどのくらいつくるのかが気になる。自然破壊に繋がらないか心配。
- 自然の共存。

**④公園整備に関する意見**

- 広大な公園を整備して集う、賑わう街にする。
- 街の中の公園などを使って、いつでも人との交流が良くなってほしい。
- 体験型学習ができる公園（森、花、つり）
- 緑を残した公園、広場、泉、並松（じのーん）の復元。
- 世代をこえた公園づくりをしてほしい。
- 森を残し公園をつくる。
- 木がこんもりとした広い公園も欲しいです。
- 幼い子も青年も老人も活用できるような大きい公園。

**⑤公共交通に関する意見**

- 路面電車を一周させる。
- マイカーを置いて、宜野湾市の新たなまちづくりでは鉄軌道や LRT などの公共交通機関の利用を推進すべき。プラス面として、自然保護になる、観光客がレンタカーなどを使わずにすむ、気軽に利用可！

- これだけの自然が集まっているから、車は通らないでほしい。路面電車を考えているみたいなので、それを利用したり、車利用を規制したりする。

**⑥自然エネルギーに関する意見**

- 自然との共生の大切さを感じた。風力発電、太陽光発電の設置を考える。
- 自然エネルギー（風力等）活用したまちづくり。
- 自然エネルギー、シンボルとなる施設をつくり、観光の目玉に！

**⑦その他意見**

- 火葬場を作ってください。
- 沖縄らしい赤瓦を、住宅をつくる際に何割か取り入れる（緑地も含む（庭等）
- 洞穴を利用したテーマパーク。
- 津波や災害時の避難場所の拠点、ヘリポート。
- 基地内の遺産は、できるだけ残すなどの努力をしてほしい。
- 野鳥や生物観察できるコミュニティ森や自然を活用したカフェ図書館みたいなもの。
- 色々な世代に適した図書館が欲しい。
- リラックスできて、学生が勉強できる場所がほしい。森カフェ。
- まちの中にゴミ箱設置。

**３）国際交流・貢献と地域コミュニティについて**

**①交流拠点に関する意見**

- 自然との共生の大切さを感じた。風力発電、太陽光発電の設置を考える。
- 自然エネルギー（風力等）活用したまちづくり。
- 自然エネルギー、シンボルとなる施設をつくり、観光の目玉に！

**②外国人対応に関する意見**

- 観光地には多くの外国人が訪れているが、外国人の対応がまだまだ出来ていないので、大学の国際文化学科などと協力して、その観光地についての説明を翻訳していけたらいいと思った。
- 必要最低限の英語を喋れるスキルが１人１人に必要だと思います。
- 外国人観光客、外国人移住者も増えているので、おもてなしを行う。
- 受け入れる地域での語学研修でおもてなし！
- 外国の人も気軽に遊びに来られるような集会所、多言語案内所。いろんなサービスが受けられたらよいのでは・・・。
- 多くの外国の方が訪れることを想定して、マナーや文化の違いが一番の問題だと思うので、分かりやすく絵や多言語で説明した看板やパンフレットを作ることが必要だと思います。
- 観光客の来訪を歓迎・交流する。

**③人材育成に関する意見**

- 人材育成に力を入れ、20 年後の外国人観光に対応。
- 人材育成をして外国語ができるようにする。
- 外国語を学べる研修センター。
- 人材育成の場を設け、国際交流に役立ててほしい。
- 人財育成。沖縄としての国際交流の場。
- これからは外国語を習得するのが大切ですので、跡地に英語しか使わない英語村を作り、英語を話せる市民・県民を増やす。
- 世界の共通語、英語を誰でも話せるように、原語を英語に。
- いつでも外国の人との話ができるように、外国語の一つでも話せたらいいと思います。
- これからの若者（子供等）には、英語教育を徹底し、県民全体が外国人とも話せるようにする。
- 外国の人と言葉が気軽に通う人材育成。
- 人財育成をし、その人たちが活躍できる場所を作って欲しい。
- 英語の向上。
- 小学校から続けているカリキュラムの見直し。
- 英語圏のエリアをつくる。
- 英語教育、沖縄文化の発展。

**④施設整備に関する意見**

- 世界の文化伝統祭で舞台発表できる場としてのコンベンション。
- 世界的イベントができる屋外劇場。
- コミュニティセンター。
- 文化交流できるシンボル的な建物。
- アジアの拠点になるような教育施設をつくり、交流の場を作っていければいいと思います。
- 待機児童の解消のためにも、保育所などを多く建設すると良い。
- 宜野湾は特に目立ったものがなくて、観光客も素通りしてしまいがちなので、そこに留まる何かの強力な施設をつくってほしい。
- 自然の中で高齢者の方々と子ども達が共に交流することが出来るような施設が必要。
- 建物だけではなくて、文化の発信もいい。（体験型施設）

**⑤地域特性を活かしたまちづくり関する意見**

- 外にない宜野湾だけのもので・・・（上地空手、田芋）。
- サッカースタジアムの建設により、海外クラブチームを招き入れる。すると外国人客が増えるので、周辺の街並みは赤瓦など、沖縄を感じられる外国人も魅了するような街づくり。
- 沖縄の中でも他の市町村にない特徴をもったまちづくりが大切だと思う。
- もともと宜野湾はアジア系やアメリカ人の住民も多いので、そのまま地域の一員として住みやすい国際色豊かなまち。
- 沖縄らしさを活かしつつ、誰もが宜野湾に来たくなる街になってほしい。
- 琉球文化の薫る街並みと、食文化を活かして。
- 沖縄の踊り、エイサーをいつでも見られるようにしてほしい。
- 沖縄らしさが伝わるような土地にしたい。
- 昔の宜野湾市を復元しながら、赤瓦屋根の家があったり、沖縄料理が食べられたり、習えたり、そういう空間ができるといい。
- まちの魅力を高めるためには公共施設や商業施設も必要だと思いますが、第一に宜野湾市らしい魅力が感じられることがまちの魅力の核であってほしいです。宜野湾市らしい文化・環境がある中に生活に必要な施設もあるというふうに感じられるまちになってほしいです。
- 那覇市の商店街のように、体験・交流型の観光を取り入れてみるのはどうか。例えば、観光客に沖縄の伝統文化、食べ物等をしってもらうために、「重箱」や沖縄の伝統料理を一生に作り、説明を交え、滞在型の宜野湾でしかできない体験型をつくり、ぎのわんファンをつくるのはどうか。

**⑥体験型観光に関する意見**

- 見るだけでの観光ではなくて、地域の人たちとかかわれる体験的な観光スポットをつくる。その方が学びもあって思い出深くなる。充実、友達もできる。イベント開催。スポーツをしたり。
- 医療（人間ドック等）の体験。
- 滞在中に沖縄食文化の体験。

**⑦その他意見**

- グローバル社会、とりわけ中国、台湾の近い国との交流づくりをすすめてほしい。
- 那覇より 30 分という立地ですので、沖縄文化の中心的な活動場所（県外の方との交流）
- テーマパークはいらない。
- 地域医療や高度な医療等が充実し、町が素晴らしいものになれば、これは自然に国際交流に貢献できることになるし、国際交流を目的として地域整備をするというのは逆の方向かなと思う。
- 食文化とホテルの位置づけ。

## ３.今後の情報発信策の具体化

今まであまり認知されていない層にも興味関心をもってもらい、地権者・市民・県民や県内外・国外の企業等幅広い層への情報発信を行う。

### （１）ホームページコンテンツの整備更新

中間とりまとめを基本的なベースとし、跡地利用計画の進行している様子を県内外、幅広い層にわかりやすく伝える。

#### １）旧のホームページの分析

１ページで構成されており、上から動画、ＰＤＦ、県民の声、普天間跡地利用計画提案受賞作品紹介、関連リンクの構成となっており、動画再生やＰＤＦをダウンロードしないと記載されている中身がわからない構成となっている。また、１ページに全ての項目を詰め込んでいるため、利用者にとって分かりづらい構成となっている。

【現状のホームページ】

【コンテンツ内容】

◆動画で紹介
・中間とりまとめ全編
・チャプター（章）ごとの動画、パンフレットダウンロード（PDF）
◆パンフレット
・全編のダウンロード（PDF）
◆関連サイトへのリンク
◆跡地利用計画提案受賞作品（PDF）
◆関係リンク
・沖縄県
・全体計画の中間とりまとめ
・宜野湾市
・沖縄 21 世紀ビジョン

### 2）制作上の視点・留意点

制作上のポイントとして全体のページ構成は、普天間未来予想図パンフレットをベースとして構成し、「基地が返還される」「まちがつながる」「緑の中のまちをつくる」「人々が集まるまちができる」項目ではチャプター別の動画と図面でわかりやすく説明、動画チャンネル「未来のまちイメージＶＲ」では、制作したＰＶをイメージのポイントと合わせて紹介、「中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想」では駐留軍用地跡地の他の事例や課題の提示をし、「跡地利用に伴う経済効果」では駐留軍用地跡地利用の那覇新都心地区の実例と普天間の予測について説明、また「県民の声」では、過去のコンテストの実績や外部組織の紹介をし、「関連リンク」では、県の関連ページや市へのリンクを紹介する。

また、各ページへの移行は、共通のグローバルナビゲーションにより各ページへスムーズに移行できるようにする。デザインについて、色彩は夢のある沖縄らしいカラフルなイメージで作成。

【新ホームページ：共通グローバルナビゲーション】

【新ホームページ：ページ構成案】

【新ホームページ：ＴＯＰページ構成案】

【新ホームページ：各ページ構成案】

### 3）沖縄県サーバーへの移行

平成 25 年度に制作した旧ホームページについては、セキュリティの脆弱性等の課題がある。

これらを改善するために、県のサーバー内にＨＰデータを移行させることにより、セキュリティの対策等の問題が解決することが可能となる。

### 4）新ホームページデータ

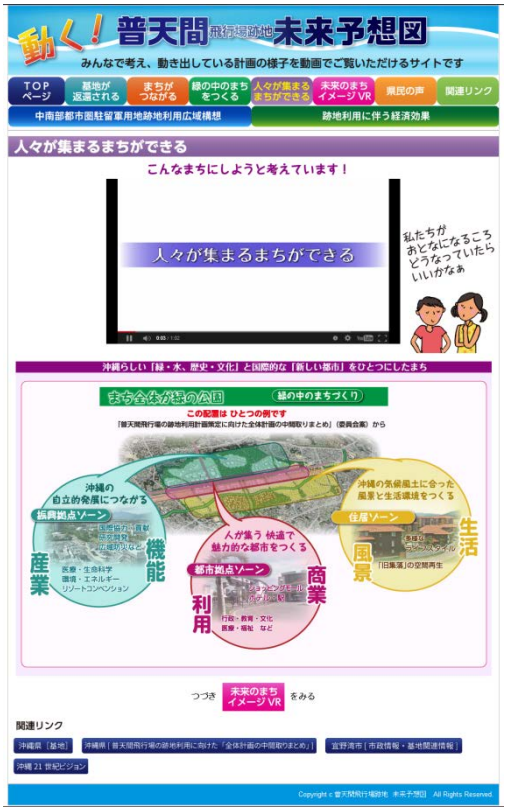
【ＴＯＰページ】

【基地が返還される】

【まちがつながる】

【緑の中のまちをつくる】

【人々が集まるまちができる】



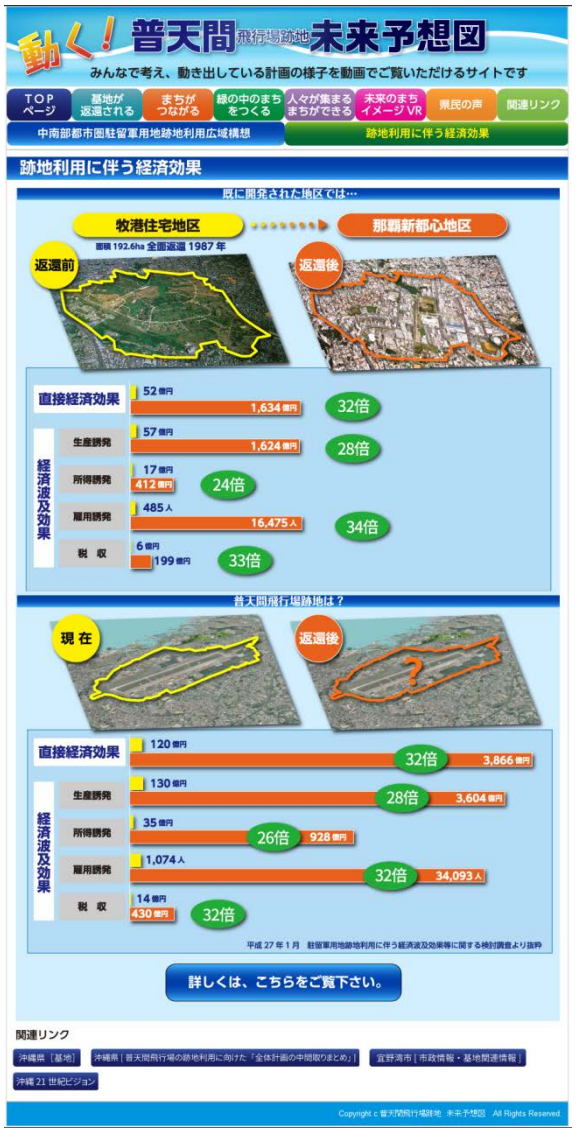
【未来のまちイメージＶＲ】

【県民の声】

【関連リンク】

【中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想】

【跡地利用に伴う経済効果】




## 5）バナー制作

### ６）新ホームページへの誘導ルート

●沖縄県

【旧ルート】

ホームページへの誘導ルートが１つしか無く、分かりづらい位置にある。

◆駐留軍用地跡地対策沖縄県本部
（沖縄県企画部 企画調整課 跡地利用推進班）

◆普天間飛行場跡地未来予想図（外部サイト）

【新ルート】

リニューアル後は、誘導ルートを「基地」「跡地利用」「跡地利用推進班」の３ルートに拡大し、なるべく多くの方にＨＰを見ていただけるように改良し誘導を強化する。

誘導強化

◆普天間飛行場跡地未来予想図
（新サイト）

●宜野湾市　現時点では誘導ルートが複数あるので、現行の更新を行う。
改良については、運用を進めていく中で検討していくものとする。

# 第Ⅴ章　海外の現地調査を踏まえた先進事例調査

# 第Ｖ章　海外の現地調査を踏まえた先進事例調査

## 1.　海外の現地調査を踏まえた先進事例調査について

普天間飛行場跡地利用が想定している、広大な公園や緑に恵まれた自然との調和の中で、魅力的な研究開発拠点を形成されている欧州の先進事例を研究し、それらを凌ぐ魅力づくりのポイントを把握することとした。

### （１）調査の概要

#### １）先進事例調査の目的

①　先進的な研究開発拠点の把握

普天間飛行場跡地に形成される振興拠点ゾーンは、西普天間住宅地区で進められている国際医療拠点形成と連携した先進的な研究開発拠点、サイエンスパークの検討が求められる。

②　海外からの投資を呼び込めるポイントの把握

これからの沖縄振興を担う基地跡地においては、海外から投資を呼び込むこと、海外から人材を集めることがますます重要となってくる。

③　「緑の中のまちづくり」のイメージの具体例の確認

国内における筑波研究学園都市や関西学研都市等も参考になるが、普天間飛行場跡地の目指す「緑の中のまちづくり」のイメージとは環境が異なる。

そこで、広大な公園や緑に恵まれた自然との魅力ある調和によって研究開発拠点の形成がなされている事例を海外に求め、それらの開発手法、基盤整備条件、企業誘致方策、現状における課題を把握する。

#### ２）視察先の選定

次の３つのポイントに基づいて、先進事例調査の対象候補先を抽出したうえで調査対象を絞り込んだ。

**①　先進医療等を核としたサイエンスパーク等であること**

**②　自然環境の保全・活用と一体的かつ融和した施設群が構成されていること**

**③　開発事業関係者（行政、事業者等）への訪問・ヒアリングが可能であること**

## （２）調査の実施

先進事例調査を次のとおり実施した。

### １）日時

平成 27 年 11 月 16 日（月）～11 月 23 日（月）　6 泊 8 日

### ２）参加者

現地視察は、以下の 6 名が参加した。

表Ⅴ-1 参加者

| 所属 | | 役職 | 氏名 |
|---|---|---|---|
| 沖縄県<br>企画部　企画調整課<br>跡地利用推進班 | | 主幹 | 花城　安博 |
| | | 技師 | 東江　信治 |
| 共同企業体（コンサルタント） | URリンケージ<br>都市整備本部　計画部 | 次長 | 遠竹　利通 |
| | 国建<br>まちづくり計画部 | 部長 | 石嶺　一 |
| | オリエンタルコンサルタンツ<br>プロジェクト開発部 | 担当主監 | 川原　伸朗 |
| | | 技師 | 荻野　太一 |

### 3）行程

次に示すとおり、ニース（フランス）近郊のソフィア・アンティポリス、ブリュッセル（ベルギー）近郊のルーバン・ラ・ヌーブ、リエージュ（ベルギー）、ボーフム（ドイツ）、デュッセルドルフ（ドイツ）を訪問した。

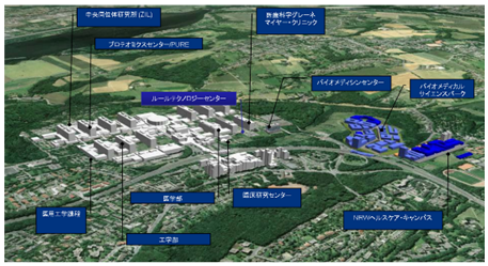
表Ⅴ-2 訪問先一覧

| | 国　名 | 訪問地 | 特　徴 | 訪問・ヒアリング先<br>（ヒアリングのポイント） |
|---|---|---|---|---|
| ① | フランス | ソフィア・アンティポリス | 恵まれた自然環境との調和に配慮したまちづくり、多国籍企業立地。コミュニティ形成 | ・ソフィア・アンティポリス財団広報担当<br>（事業概要、課題等）<br>・コート・ダジュール経済開発局担当者<br>（開発経緯、開発手法、企業誘致戦略、課題等） |
| ② | ベルギー | ルーバン・ラ・ヌーブ | 大学（ガウン）と街（タウン）の一体化、都市アメニティ重視と人間優先のまちづくり | ・UCL 広報室<br>（開発経緯、都市づくりの特徴、サイエンスパーク成立条件、基盤整備の内容、課題等） |
| ③ | ベルギー | リエージュ大学・ライフサイエンスラボ | 地域産業である農業及び大学と連携した生命科学産業クラスターの形成 | ・リエージュ大学学長室<br>（修復地における都市農業と都市産業における大学の果たす役割） |
| ④ | ドイツ | ボーフム・メディカルクラスター | ルールボーフム大学を核とする生命科学産業クラスターの形成 | ・ヘルスケアキャンパスボーフムのマネージャー（ノルト・ライン・ヴェストファーレン（NRW）州経済振興公社）及びルール大学ボーフム校教授<br>（医療クラスターの開発概要、開発手法、基盤整備内容、企業誘致方法、課題等） |

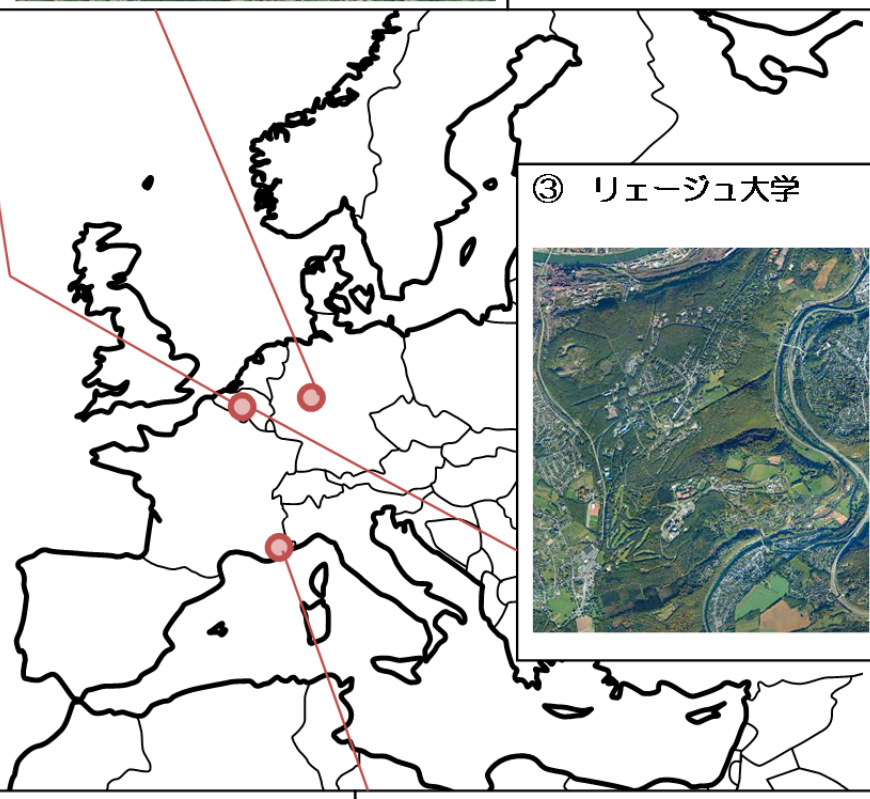
②ルーバン・ラ・ヌーブ

- ブリュッセルから南東約 51km に位置する。
- 1968 年に開発が着手された。
- スモール・イズ・ビューティフル、ヒューマンスケールの街づくりが実践され、大学（ガウン）と街（タウン）が一体化している。
- 大学とサイエンスパークの連携（産学共同サイクロトロンなど）
- 都市のアメニティの重視（芸術文化）と人間優先（歩車分離）

④ボーフム・メディカルクラスター



- ルール大都市圏へ容易なアクセス、かつＮＲＷ州の各都市（アーヘン、ボン、ビーレフェルト、ドルトムント、デュッセドルフ、エッセン、ケルン、ミュンスター等）と容易に協力関係を構築。
- 医学、電気工学・情報技術学、機械工学、バイオ・化学・物理学と連携した産業クラスターを形成。
- 開発規模 5.25ha（非開発用地 9ha）



③ リェージュ大学



- ヨーロッパの中心に位置する好立地。河川、鉄道、空港に恵まれる。
- 鉄鋼業衰退以降の新産業創設のためにサイエンスパーク他、大学と民間との起業連携を実施。
- 都心の歴史的キャンパスに加え、郊外の広大なキャンパスを持ち、文化的環境を創出。

①ソフィア・アンティポリス

- 南仏ニースとカンヌのほぼ中央の山間丘陵部に位置。
- 1969 年に開発が着手された（開発規模：2,400ha）。
- パリ地区への都市機能集中改善とバルボンヌ地方の経済危機への対応（新たな産業立地の展開）が目的。
- レジャー地域への近接性が重視された（研究者の余暇、休暇）。
- 多国籍企業の立地が顕著（1,200 社、2,000 人）
- 恵まれた自然環境との調和に配慮した産業クラスター形成

図Ⅴ-1 訪問先概要

### （３）調査結果のとりまとめ

主な訪問先である、ソフィア・アンティポリス：財団広報担当／コート・ダジュール経済開発局、ルーバン・ラ・ヌーブサイエンスパーク事務所、リエージュ大学／サイエンスパーク、ボーフム・メディカルクラスター：ヘルス・キャンパス・エイジェンシー、レーヴァークーゼン：NaturGut Ophoven（自然保護公園及び環境教育施設）とそれらに付随する訪問成果について取りまとめる。

#### ① ソフィア・アンティポリス：財団広報担当／コート・ダジュール経済開発局

**概要/写真**

ヒアリング日時：2015 年 11 月 17 日　14：00～16：00
ヒアリング場所：ソフィア・アンティポリス財団・会議室
ヒアリング対応者：ソフィア・アンティポリス財団
・開発戦略主幹　Philippe Mariani(フィリッペ・マリアニ)氏
・広報主査・地域連携マネージャー　Farouk Rais(ファロー レイス)氏
コート・ダジュール開発局（チーム・コートダジュール）
・国際ネットワーク主幹　Jean-Francois Chapperon
（ジャン・フランシス・シャペロン）氏

ヒアリング及び視察状況

| ヒアリング概要 |
| --- |
| **《開発コンセプトや考え方の基本について》**<br>・ソフィア・アンティポリスの開発コンセプトは、ネーミングの由来をもって理解できる。ソフィアはギリシャ神話の「叡智」を象徴する神であり、アンティポリスは反都市という意味である。<br>・40 年以上前に、森林地帯の何もなかったところで、未来の新産業サイエンスパークを創ろうというアイディアで、その実現が始まった。<br>・最初に建てられたオフィスは、小さな小屋だった。その小屋がだんだん大きくなって今に至っている。ここでの開発は本当に何も無いところから開発をスタートしている。従って、何かと連携させる必要がなく、新しいコンセプトの都市をつくることに成功した。<br>・普通は市場性に基づいて開発の計画が実施に移されるが、ここでは「技術」に基づいて開発計画が進められた。必ずしも儲かるという理由だけでなく「南仏地域に　最新の技術を持ち込む必要がある」という要請（ニーズ）が先行した。<br>・開発を先行させることによって、道路や公共交通などのインフラは後から整備されていった。<br>・ソフィア・アンティポリスの都市開発コンセプトは、今では既成市街地の再開発でも応用されるようになっている。<br>**《開発戦略やインセンティブ等について》**<br>・コート・ダジュール地域は古くから観光産業が経済の中心であったが、現在では IT 産業の方が経済規模は大きくなっている。<br>・世界中から有能な科学者や技術者を集積させるための環境づくり（質の高い住宅や商業・サービス施設の充実）を図っている。ここでは、何か中心になるものを敢えてつくらない。これが、アンティポリス（反都市）の考え方である。緑豊かな環境の中で、科学者や技術者が気持ちよく健康的に仕事ができ、生産性が向上するという科学的根拠があり、企業は好んで、ソフィア・アンティポリスに研究開発拠点を立地させた。<br>・初期段階では、複合多機能（ミックストユース）を想定していなかったが、開発を進めていくうちに職住近接が重要であることに気づき、住機能等を導入することにした。<br>・ここは、５つの地方自治体にまたがったエリア開発となっており、５つの自治体が連携して開発や土地利用促進を行うために財団を設立した。<br>・また、研究開発拠点を立地させた場合、企業には 30%の法人税減免がある。その他、企業に対する補助金等も多岐に亘って用意されており、企業はそれらを活用してメリットを得ている。（コート・ダジュール地域では、これまで€2 億 9 千 4 百万が 174 の事業に補助金として拠出されており、それらの事業は€70 億もの IT 技術の研究開発投資に関連している。これは主に、ソフィア・アンティポリス関連のものである。）<br>・民間企業が土地利用をするにあたっては、開発面積の２／３を緑地にすることを義務付けている。<br>・建築物の景観については、国のレベル、自治体のレベル、ソフィア・アンティポリスの各階層で細かい規制がある。開発許可は財団を通じて各自治体が行う仕組みになっている。<br>・道路などのインフラ整備は各自治体の役割である。<br>・ソフィア・アンティポリスは南仏地域の先端研究開発をリードしてきた。最近はこの事業モデルを使って、コート・ダジュール地域全体の経済力を底上げしていく取り組みを行っている。 |

・サイエンスパークは常に世界を相手に技術の最先端を担うことが重要である。ソフィア・アンティポリスは、世界で４番目に IT 化が進んだ都市としてランキングされている。都市生活の中で IT 技術を実際につかう社会実験をニースやカンヌで進めており、技術が実際に社会の中で活用されていることを現実に見て体験することができるように地域連携を図っている。

**《用地の取得について》**

・土地は原則として自治体（州政府及び５つの市）の所有であり、用地買収等の問題は抱えていない。

・企業進出にあたっては３つの選択肢がある。

一つは、土地を買って建物を建てるケースであり、購入した土地に企業が好きなように開発できるかどうか（各自治体の開発許可が得られるか）がリスクになる。

二つ目は、既に建てられている建物を借用するケース（ソフィア・アンティポリス進出企業の 80%程度がこの方法を選択している）。

三つ目は、ビジネスセンターに入居する方法である。この方法によれば事業スタートが早く実現し、初期投資を低く抑えることができる。

**《現状における開発課題について》**

・世界の最先端を行くために何がこれから重要になるかを戦略的に考えている。

・今後有望となるのは自動車と IT 技術の連携である。クルマの自動運転の技術やそれを活用する一連の技術に注目している。

◇手前は新設の研究施設、北側の斜面地にガルブジェールの住宅群が広がる

◇サン・フィリップのタウンセンターから北側のゴルフ場を見る

◇アウト・サントリューのタウンセンター（住宅や事務所、自動車学校が立地する）

◇研究開発施設が立地するソフィー・ラフィテの中心部
（ソフィア・アンティポリス財団も立地）

**＜ソフィア・アンティポリスの周辺状況＞**

ソフィア・アンティポリスは、プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏に含まれる。この地域圏は、フランス南東部の地中海沿いの地域圏であり、東部はアルプス山脈をはさんでイタリアと国境を接する。北はローヌ＝アルプ地域圏、西はラングドック＝ルション地域圏と接している。地域圏面積は 31,400km²である。

コート・ダジュールには国際的に名高い風光明媚な海岸がある。同地域圏の首府はニースではなく、フランス第二の都市・マルセイユにあり、日本国総領事館も同地にある。石油化学工業や鉄鋼業の他、観光も盛んに行われている。

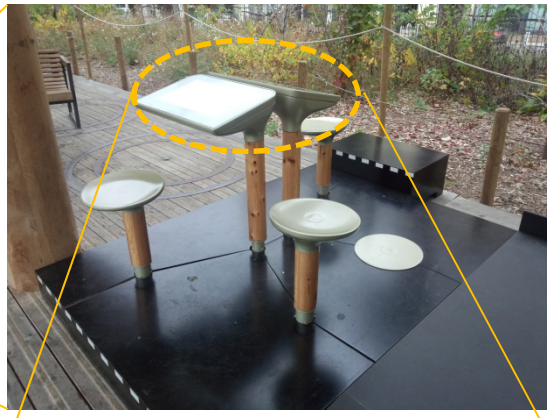
日本の中国地方 5 県ほどの広さに、広島県と岡山県を足した人口とほぼ同程度の住民が在住（4,742,930 人（2005 年））する。気候は地中海性気候の影響で一年を通して温暖で乾燥しており、世界中の著名人がニース、カンヌなどに別荘を構えている。

ニースは、フアルプ＝マリティーム県の県庁所在地である。市域人口 346 900 人、都市圏人口 973 231 人、人口密度 4771 人/km²（2005 年）。市域面積 71,92km²（7,192ha）である。

アルプ＝マリティーム県には、グラース郡とニース郡がある。2 郡の合計で、52 の小郡、163 のコミューンがある。県経済は第三次産業が中心である。農業、工業の割合は小さい。

**◇ニース**

ニースの中心市街地には、環境配慮やＩＴ技術を応用した情報提供機器が公共空間に設置されている。



アルベール 1er 庭園（Jardin Albert）

ニース駅（Gare de Nice-Ville）前にある
民間企業によるＥＶシェアサービス（Autobleue）

中心市街地の公共交通は、バスとＬＲＴが使われているが、観光客用のトレインも市街地の移動手段のひとつになっている。

シェアードスペースとなっているマセナ広場（Place Masséna）の中央をＬＲＴがゆっくりと走る

マセナ広場とガリバルディ広場を通る区間は、都市景観に配慮し、架線給電ではなく蓄電池を使用してＬＲＴが走行する

マセナ広場を起点に旧市街地を経由して眺めの良い城塞跡地（Parc de la Colline du Château）を往復している観光用のトレイン

## ◇カンヌ

人口 70,400 人（2007 年）。人口密度 3,430 人/km²。市域の面積 19,62km²（1 962ha）。

コート・ダジュール（Côte d'Azur）で、ニース（Nice）に次ぐリゾート地。ニース西南約 30km。

中世から 19 世紀頭までは、農業、水産業を中心とする村落であったが、1834 年、イギリスのブルハム卿がイタリアへの途上滞在したのをきっかけとして国内外の貴族がこの地域に別荘を建てはじめ、次第に高級リゾート地へと発展した。カンヌ映画祭の開催地として、世界都市として認知されている。

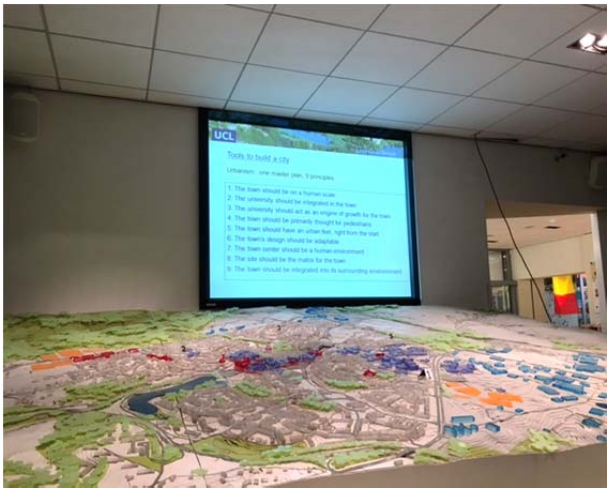
カンヌ港の前は広大でオープンな歩行者広場になっている（地下に駐車場が設置されている）

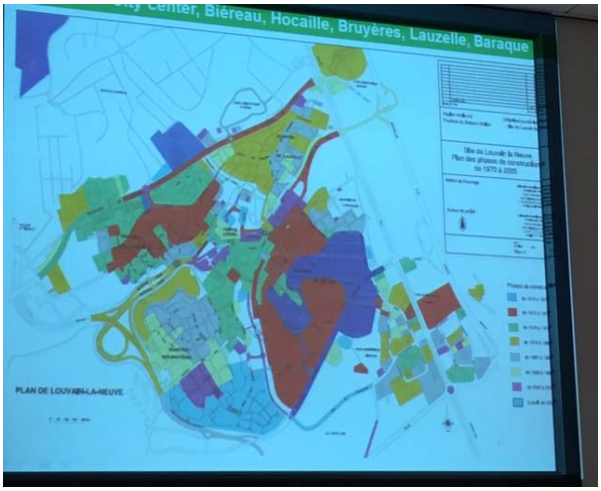
カンヌ港に隣接して映画祭の会場となるコンベンション施設（Palais des Festivals）や遊戯施設の外に市民がペタンクを楽しむ公園や庶民的はカフェやレストランがある

## ② ルーバン･ラ･ヌーブ サイエンスパーク事務所

**概要/写真**

ヒアリング日時：2015 年 11 月 19 日　10：00～12：00
ヒアリング場所：UCL(ルーバンカトリック大学)会議室
ヒアリング対応者：ルーバン・ラ・ヌーブ　サイエンスパーク事務所
プロモーション・国際交流担当
Ms. Magdalini Ioannidis（マグダリーニ　イオニディス）女史





**ヒアリング実施状況**

**ヒアリング概要**

**《サイエンスパークについて》**

・サイエンスパークはUCL（大学）の一部であり、企業を誘致する責任がある。

**《ルーバン市の都市の発展について》**

・1970 年初頭は 8 つの農場があるのみの地域であったが、2015 年の現在では、スマートナレッジシティ（知識集約型都市）となっている。

・ベルギーの中で、最も新しい都市であり、ヨーロッパの中で最も新しい都市である。

・政策的な戦略から、ルーバンからＵＣＬ(ルーバン・カソリック大学)が退去する必要があり、1960 年代後半にこの地に移動することとなった。
・フランス語系の市民が生き残るために、1971～1972 年に大学の学術施設と居住施設を建設した。
・1979 年頃には、すべての施設が完成し、大学の移転が完了した。
・大学を移転するだけでなく、地域経済を発展させるために、住む場所と働く場所を一緒に作った。
・当時では、非常にユニークなものであった。当時の開発は、古い建物を壊して、道路等を建設することが一般的であったが、ここでは、田舎の地域に新しい都市を建設した。
・2～5 年前にほとんどの開発が終わったが、今でも多少の建設が残っている。
・大学の生き残りというものを良い契機として、都市の開発を行った。
・今のルーバン・ラ・ヌーブの立地は、幹線道路、鉄道、空港に近い、良好なアクセス環境となっている。

**《都市開発の原則について》**

・都市の開発は、以下の 9 つの原則に基づいて行われた。

1. The town should be on a human scale
   (都市をヒューマンスケールに（小さく）する。)⇒自動車中心ではなく。
2. The university should be integrated in the town
   (大学を都市の内部に統合する。)
3. The university should act as an engine of growth for the town
   (大学が都市の成長のためのエンジンとしての役割を果たす。)
4. The town should be primarily thought for pedestrians
   (歩行者を最優先に考えた都市とする。)
   ⇒実際に、特徴的な歩道が都市の中に作られている。
5. The town should have an urban feel, right from the start
   (最初から、都市的雰囲気を持った都市とする。)
6. The town’s design should be adaptable
   (柔軟性のある都市デザインとする。)
7. The town center should be a human environment
   (都市の中心を人間の環境とする)
8. The site should be the matrix for the town
   (そこが都市の母体・土台となる。）⇒さまざまな人が出会う・交わる場所となる。
9. The town should be integrated into its surrounding environment
   (都市を周辺の環境の中に統合する。)

**《都市開発の規模感について》**

・谷間の地形を造成せずに、その上に人工地盤を作り、施設をその上に、その下に駐車場を整備することで、歩車分離を図った。駐車場は 7,000 台を収容できる。
・大学の移転の際には、国家から大学に移転のための補償金が払われた。
・この補償金は、貸与されたもので国家に返す必要があるものであった。総額は 7.5 億ユーロ（750 million Euro）であった。2012 年に全額返金した。
・国家からは一つの条件が課せられた。その条件は、土地の所有権は UCL に許可されており、売却してはならないというものであった。

・2500 エーカー（約 1,000ha）の土地を第三者に貸すようにしている。
・都市自体は 920～1,000ha の小さな範囲に収まっている。都市の中心の周りに森とサイエンスパークが位置している。
・大学の施設はまとまって一つの敷地にあるのではなく、都市の中にちりばめられたように配置されている。
・人工地盤は、2－3 層あり、39cm の厚さがあり、7.5 エーカー（約 3ha）の広さがある。地盤面から 6.75mの高さにある。
・ルーバン・ラ・ヌーブの人口は約 33,000 人で、夜間人口は 20,000 人で、約 11,000 人は長期的に住んでいるひとで、約 9,000 人は短期的な居住者（学生など）である。125 の国籍の人が住んでいる。
・ショッピングモールもあり、37,000 ㎡に 350 の店舗が入っている。

**《事業スキーム等について》**

・土地貸借代は低く抑えていて、会社や個人が毎年、UCL に支払うようになっている。
・土地の貸借代を低く設定・コントロールすることで、投機的リスクを下げ、会社・個人が継続的にこの地に入って来られる環境を作っている。
・このシステムのおかげで、革新的な企業が入ってきやすくなっている。
・住宅の床の貸借に関してはコントロールしていなく、市場のマーケットに委ねているので、賃料は高くなっている。ただし、学生用の住宅に関してはコントロールしていて、市場より低い金額となっている。
・移転に際しての、人材に関しては、専門チーム（都市開発と建築）を作った。
・ここには、大きな一人のリーダーがいるのではない。大学の学長と市長の 2 人がリーダーとなっている。
・企業等がここに建築する際には、基準に合うかどうかの審査を大学が行っている。(そのような大きな権限を大学が有している。)
・その審査に通過したら、市が最終的に許可を出す。
・大学（UCL）が地域の経済発展の責任を負っているので、このような 2 重のシステムとなっている。
・住んでいるのは 200 人、働いているのは 5,000 人ぐらいになっている。
・UCL の年間予算は 2 億ユーロ 200 million Euro であり、市の予算の 10 倍に相当する。
・ミッシェル・ワタン氏がこの地に来て、大学を移転する際に、市長とこの土地で自由に大学を作って良いと約束した。2 人は第二次世界大戦時での戦友であった。
・Bipartite と Quadripatite という組織を作っていて、それらが年 1 回程度の会合をして、この地の課題等を話し合い、将来のプランを作っている。
・Bipartite は UCL と市の 2 者の代表が集まったもの。Quadripatite はそれらに加え、商業者と住民を入れた 4 者の代表が集まったもの。
・ここでの建築はデザインコードのようなものがあり、壁は煉瓦でつくり、屋根はスレート（粘性土）で作り、歩道を白い舗装にする、窓のフレームは木で作ることが決められている。調和のある街並み・建築群を実現している。
・民間企業の投資には、投資額の２％分は、このパークの文化・芸術の投資に使われることに決まっている。その資金を使って、人々が憩うための美術館や公園等の整備をしている。

**《都市開発の成果と今後の開発の展望について》**

・文化やスポーツ関係の施設も整備されている。劇場、映画館、コンサートホール、会議場、現代美術館、スポーツセンター、プールなどがある。
・タンタンというアニメキャラクター（日本でも有名）の作者エルジさんの作品の展示するエルジ美術館もある。
・30,000 人の学生の 20%が外国籍の留学生である。
・昼間人口は約 50,000 人で、そのうち 12,000 人は勤労者である。
・就業率や起業率がワロニア州で最も高く、生活水準も平均を上回っている。
・ルーバン・ラ・ヌーブは、(アメリカのカリフォルニアに例えて) ワリフォルニアと呼ばれている。
・4 つの成功の要因があると考えている。好立地（ブリュッセルから 30km)、土地所有制度（大学がコントロールできる)、混在性 (機能や居住者)、ヒューマンスケール (小さな都市、100 万人のような大都市でなく)。
・小さな都市に人や施設が集積しているので、いろいろな連携が生まれている。
・新たな建設プロジェクトがあり、新しい駅を建設している。ブリュッセルから 30 分で移動できるようになる。3,000 台の駐車場を建設し、ここに車を停め、ブリュッセルに行けるようになる。
・600 戸の高級住宅を駐車場の上に作ることになっている。
・エルジ美術館とルーバン・ラ・ヌーブ美術館の新設の計画もある。

◇ルーバン・ラ・ヌーブの商業施設等が集約された中心地区（人工地盤の広場、下部は駐車場）

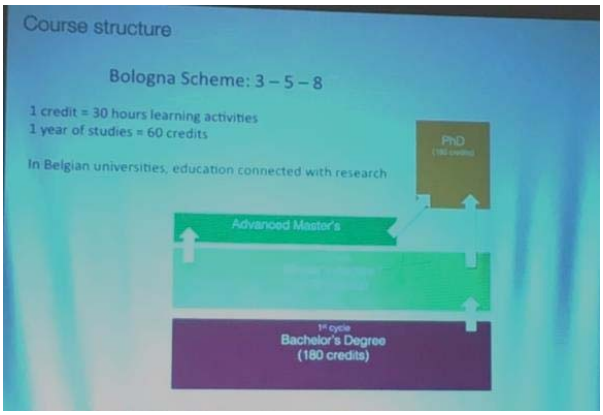
◇ルーバン・ラ・ヌーブ全景（鳥瞰）（UCL 提供）

◇ルーバン・ラ・ヌーブの中心部（鳥瞰）（UCL 提供）

### ③ リエージュ大学/サイエンスパーク

**概要/写真**

ヒアリング日時：2015 年 11 月 19 日　15：00～17：30
ヒアリング場所：リエージュ大学　会議室
ヒアリング対応者：リエージュ大学
・副学長　Leroy Pascal（レロイ パスカル）氏
・農業生物研究所　Ph.D. Bach Kim Nguyen（バック キム グイェン博士）



**ヒアリング実施状況**

**ヒアリング概要**

**《リエージュ大学について》**

・リエージュはちょうどヨーロッパの中心に位置しており、好立地である。
・交通の便では、河川、鉄道、空港もある。
・サイエンスパークは大学の一部となっている。
・午前中に行った、UCL はカトリック系の大学で、リエージュ大学は宗教には関与していない大学という違いがある。
・1817 年に大学が設立された。
・いくつかのキャンパスがあり、ここにはサイエンスパークがある。
・Gemblux には農業生物学の研究科がある。農場や研究施設等がある。Arlon は環境の研究科がある。
・海外にも研究拠点がある。コルシカ島で海洋研究、スイスには気象学の研究所がある。

・23,000 人の学生のうち 23%は留学生である。日本人も数名いる。
・500 近くの研究ユニットがある。大学の研究から発展した 113 の事業（spin-offs）がある。
・120 近くの事業を生み出したということで、研究を事業化する面で我々はリーダーと言える。
・リエージュ宇宙センターが最も大きい機関である。衛星等に取り付ける鏡を作っている。
・マイクロ製品や武器（銃）などの製品化も行っている。
・宇宙開発にはとても多くの企業・産業がかかわっている。エンジンをつくる会社など。
・大学教授、技術が集まっているので、サイエンスパークで多くの人が働ける環境がある。
・サイエンスパークは単独では、存在はできず大学とのつながりが必要である。政府が 700ha の土地を提供してくれている。
・日本にもサイエンスパークはあると思うが、ここの 80%以上はハイテク技術に関するものである。宇宙科学、農業生物学、生命医学等である。
・9 つの学部があり、学部間の連携で新しいものを作り出している。
・例えば、映像のスローモーションの技術開発も行っている。衛星や天体望遠鏡に使用する鏡の開発や女性の健康に関する薬剤の開発、チョコレートを含む様々な食品開発、大学の附属病院との連携した研究開発も行っている。
・この 700ha の中で様々な機関が連携する環境ができている。
・企業にとって魅力的な場所である必要があるので、研究施設だけでなく、文化・芸術の施設もある。
・最初は 10 人程度の研究チームから始まって、成果を上げて徐々に大きくなれば、より大きな土地で研究開発をできるようになっている。
・政府の資金を使うので、それなりの審査がある。
・サイエンスパークの事業に関しては、審査項目（地域や大学への貢献など）があって、審査を通ったものがここの施設や助成金を使うことが出来る。

**《農業生物の事業について》**

・2050 年には世界の人口は 96 億人になり、その 3 分 2 である 60 億人が都市に住むことになると言われている。
・そうなると、食料供給の問題が起きる。また、公害・気候変動などが問題になる。
・よく言われることだが、フットプリント（自然資源の消費量）を減少させることが重要となる。
・将来のことを考えると、何らかのイノベーションが必要である。また、どのような機会があるかが重要である。事業をする際には価値の創出が必要。環境や地域への貢献がその価値の一つとなる。
・この地は、かつては鉄鋼業が盛んであったが、今では 10,000ha の汚染された土地が残されることとなった。
・現時点の産業では、生み出したエネルギーの 20%は無駄になっている。
・これらの使われていない汚染された土地、施設、エネルギー（高温ガス、高温水等）を活用することが課題になっている。
・炭素ゼロ、廃棄物ゼロ、エネルギーゼロ、知識の乏しい人材ゼロという 4 つの目標を掲げて事業を実施している。
・荒れた建物と高温ガス・高温水等を活用して、熱帯の環境を作って、熱帯の植物を作り、それらを原料に医薬品や化粧品をつくるということを研究している。

・また、それらの廃棄物を使ってエネルギーをつくることも研究している。そのエネルギーでここでの施設を稼働するという循環を考えている。
・ある施設では、魚を育てている。魚の排泄物が混ざった水が栄養となり、植物を育てるという循環も作っている。
・コンテナを使って、その中で植物を育てている。エネルギー元に近い場所に移動することが容易になる。
・薬剤の原料となるものは、熱帯の地の植物を使う。この場所で、原料から栽培・生産できるようになるので、熱帯の地域から輸送することが無くなる。
・菜の花のような黄色い花を咲かせる植物を植えることで油をつくることができるようになっている。見た目にも良い。土壌の浄化にもなる。
・他にも海藻を養殖する工場もある。法制度的に建物を壊すのが難しいので、何らかの活用方法を見出さなければいけない。
・研究科の専門性に応じて、連携する企業も変わってくる。インフラの整備が非常に整っているので、企業にとっては魅力的な土地である。
・多くの企業が一つの場所に集まることによって、インフラやエネルギー等を分かち合うことができる。
・企業と大学の研究を結びつけるような組織がある。
・事業はまだ整備途中であり、進捗度は 25%ぐらい。来年中には 100%になり事業を始められることを目指している。
・人材に関しては、今のままでは十分ではないので、新しい人を雇う予定がある。いつまでも大学からの支援を得られるわけではないので、事業の発展に応じて人を入れていく。
・プロジェクトを推進する強力なリーダーのようなものいない。様々な小さな企業や大学の研究を繋いでいく循環システムやネットワークのようなものが重要になっている。
・土壌浄化の専門業者もあるが、非常に高価である。その代替として、植物（菜の花のようなもの）を 1～2 年植えることで浄化をしている。土地の活用方法が見つかれば、この植物の栽培をやめて、土地を使うことも容易にできる。植物を植える方法の方が安く・早く始められる。

Liege University, Sart Tilman Campus（リエージュ大学、サーティルマンキャンパス）

（出典：リエージュ大学 Ｗｅｂサイト）

サーティルマンキャンパスの学内エリア
Le domaine universitaire du Sart Tilman

（出典：リエージュ大学 Webサイト）

Zone nord

Amphithéâtres de l'Europe

Restaurants

Physique

Chimie

Résidences étudiantes

Trifacultaire

Faculté de Droit et
HEC Ecole de Gestion

Faculté de Psychologie et
Sciences de l'Education

PCC et ARI

Centrale de chauffe

Institut de Géographie

Institut Montefiore et SEGI

Institut de Mathématiques

Génie civil et Aquapôle

Université de Liège - Photos du Sart Tilman et du 20-Août（リエージュ大学サーティルマンキャンパスの写真(8 月 20 日)）

Château de Colonster

CHU

Institut de Botanique

Faculté de Médecine Vétérinaire

Ferme expérimentale

Centres sportifs - Blanc Gravier

◇Château de Colonster（旧領主の館が大学の迎賓・セミナー施設として利用されている）

（出典:リエージュ大学 Webサイト）

## ④ ボーフム・メディカルクラスター：ヘルス・キャンパス・エイジェンシー

| 概要/写真 |
|---|
| ヒアリング日時：2015 年 11 月 20 日　14：30～17：30<br>ヒアリング場所：ボーフム・メディカルクラスター施設内会議室<br>ヒアリング対応担当者：・ボーフム・ルール大学　教授<br>Dr.Rolf　Heyer（ロルフ　ハイヤー博士）<br>・ヘルス・キャンパス・エージェンシー　マネージャー<br>Mr.Johannes　Peuling（ジョハネス　ペウリン氏） |

ヒアリング及び施設内視察状況

## ヒアリング概要

**《ヘルス・キャンパス・エイジェンシー（運営組織体）とその機能について》**

・3 つのタスクフォースが組織されて、このエイジェンシーは作られた。
・トップのマネジメント組織、建築と計画の組織、技術と科学の機能化の組織の 3 つである。
・4 年ほどかけて、エイジェンシーができた。
・企業を誘致するのに十分なスペースがあるだけでは、企業は来ない。機能しているネットワークを探して来る。
・革新的で患者にとってのソリューション、新しいマーケットをつくることが重要である。
・ボーフム市や企業からも人が入って作られている。
・ボーフム市の価値を高めることが求められている。
・ボーフムに入っている企業をサポートする企業も入っている。
・健康の分野で成長している分野、ターゲット分野を定めている。
・医療 IT、放射線/映像化、人工装具、タンパク質解析、人材育成、地域医療等の分野である。
・新しい分野であるリハビリ補助人工装具の CYBERDYNE 社の山海氏もここに研究施設（サイバーダインケアセンター）を持っている。

**実証実験を進めるベルクマンスハイル大学病院の医療ディレクターが来日**

NRW 州ボーフム市のベルクマンスハイル大学病院はドイツ初の労災病院として、設立当初はその名の通り、近郊の鉱山で負傷した炭坑夫の治療を行ってきたが、昨今は最新の医療技術開発に積極的に取り組み、革新的な姿勢が高く評価されている。

その一例が昨年秋にスタートした CYBERDYNE 社のロボットスーツ HAL®の医療現場における実証実験だ。CYBERDYNE 社は筑波大学大学院システム情報工学研究科の山海嘉之教授が設立し、事故等の負傷により歩行などが困難な患者の自立歩行支援用ロボットスーツ HAL®を研究開発し、また市場への投入を進めている。同社は NRW 州ボーフムに 2011 年 5 月、ドイツ現地法人を設立。ドイツ、またヨーロッパでのビジネスを念頭に同市のベルクマンスハイル大学病院とともに協力関係を築いてきた。

同病院のメディカル・ディレクター、トーマス・シルトハウアー教授は HAL®を使用した昨年 9 月から医療工学やロボットを使った対麻痺患者に対する治験をおこなっており、特に新たな医療機器またロボティクスの医療現場への導入などにも大いなる関心を寄せている。シルトハウアー氏はこのプロジェクト推進のため 3 月半ばに 3 度目の来日を果たし、23 日には「サイバニクス国際フォーラム 2013」（於：東京国際フォーラム）に登壇し、治験の経過を発表した。

＜関連記事：http://nrwjapan-news.com/2013/3/5＞

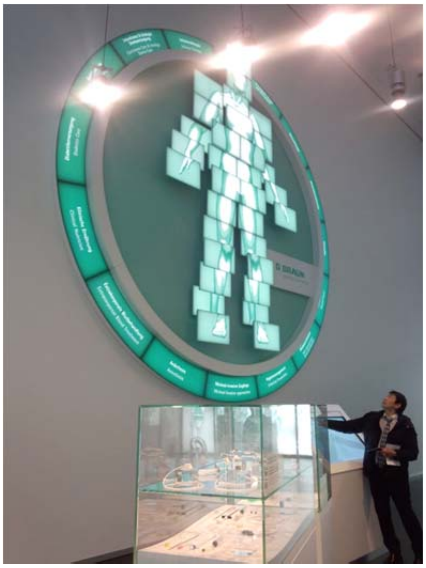
・ドイツ政府が力を入れている分野として、タンパク質解析/生命解析の分野があり、ここにサイエンスセンターをつくることとなった。
・人材と技術のベースがあって、それらがリンクして、革新的で患者にやさしいソリューションを提供するというコンセプトで行っている。
・このエイジェンシーはビジネスと科学とヘルスケアの提供の 3 つが大きな柱となっている。
・2012 年の世界における医療製品のマーケットは 2,200 億ユーロ(220 Billion Euro)で、ドイツはその 1/10 である 220 億ユーロのマーケットとなり、世界で三番目に大きいマーケットを持っている。これは、ユーロ全体の中の 1/3 にあたる。
・これだけの大きなマーケットを持っているので、大きな企業がここに投資する理由となっている。
・ボーフムはルール都市圏の中にあり、ルール都市圏はドイツで一番大きな都市圏である。
・127 の医療研究機関が集積していて、ヨーロッパの中でも最も大きなヘルスケアの市場のひとつとなっている。
・東西南北の方向にアウトバーンが整備されており、製造したものを運ぶ有利な基盤がある。
・このエイジェンシーはいわば、コンサルタントのようなもので、有力な企業にここを紹介して、ネットワークを繋ぎ、誘致する役割を持っている。ソフト的な役割である。

・ハードの基盤を整備するのはEGRという開発会社が別にある。政府が100%出資している会社である。
・ボーフムは 50 年前、炭鉱産業の町であった。60～70 年代に炭鉱は閉鎖になった。鉄鋼企業は残っている。
・その後、NRW州がルール大学を設立し、ルール大学は自動車メーカーを作った。その親会社はGM（ゼネラルモーター社）である。
・3 つの工場がある。物流センター、部品製造工場、自動車製造工場の 3 つである。1962 年にオープンし、昨年の 12 月に閉鎖になった。
・その後、PPPの会社が跡地を活用している。自動車メーカーであるOPER社とコラボレーションしている。NRW州政府の援助を受けて、70haの土地の活用を行っている。
・交通の便が良いことと都市の中心部に近いという 2 つの大きな利点がある。
・1 億ユーロ以上の政府の援助を受けている。土地の開発や販売等にこの補助金は使われている。
・エネルギー効率を上げるセンターや文化・芸術系の施設もある。都市的な活動ができることが重要となっている。
・Dr. Rolf　Heyer（ロルフ　ハイヤー博士）は、ドイツの多くの軍事基地の跡地の利活用のプロジェクトを行ってきた。イギリス、アメリカ、オランダ、フランスの基地などがあった。EUに統合された際に、必要なくなったそれらの土地の有効活用を行ってきた。英国の空軍基地の活用も行った。（⇒基地跡地利用のケーススタディとして、彼のフィールドを紹介してもらうことは、今後は有益と思われる。）

◇ルール大学ボーヘムキャンパス方面（手前は緑地）

◇ボーヘム・メディカルキャンパス

◇エスクラップ社展示施設



## ⑤ レーヴァークーゼン:NaturGut Ophoven(自然保護公園及び環境教育施設)

**概要/写真**

ヒアリング日時：2015 年 11 月 21 日　14：30～17：30

ヒアリング場所：NaturGut Ophoven

ヒアリング対応者：Ms.Marianne Ackermann(マリアンヌ・アッカーマン)元会長

Ms.Ute Pfeiffer-Frohnert（ウテ　ファイファー・フロネル）女史

**ヒアリング及び施設内視察状況**

## ヒアリング概要

**《NaturGut Ophoven 環境学習センターについて》**

・この施設はこの地域でもっとも古い建物で水道と農場の宿泊施設であった。
・1978 年にレーヴァークーゼン市が買い取り 1984 年にチャリティー基金を設立して運営が始まった。
・子供たち用の環境学習センターとして活用している。小学校や幼稚園の生徒を中心に様々な人を受け入れて、環境学習を行っている。
・年間 3 万人の訪問者がいる。市外からも多く来る。
・低炭素や気候変動に対する活動を行っている先駆者的な存在である。いくつかの賞（国・市・UNESCO 等から）も受賞している。気象の観測も行っている。
・庭師が入って、このパークを保護している。なるべく自然に近い雰囲気を残している。
・見たり、触ったり、楽しみながら体験し、学習できる活動をしている。
・電気を使う製品（扇風機、パソコン、ドライヤー等）にプラグを指し、どのぐらいのスピードでエネルギーを消費するかを目で見てわかるようにしている。
・ビデオの映写もやっている。(女の子が環境のことを学んで、日々の暮らし方を考え直すストーリー)
・5 つの大陸別のブースを作っていて、その地の人々（イヌイットやインドやアフリカ等の人々）が気候変動によってどのような困難に陥っているかを見て回ることが出来る。最終のステージでは、気候変動の世界会議に出席して、議論するようになっている。
・Climate Happiness（気候の幸福）をテーマに考えて、気候変動に良いものと悪いものが何かを勉強できるようになっている。
・太陽光発電で動くおもちゃの展示もしている。
・施設は、なるべく環境にやさしい材料で作っている。
・人件費・光熱費・維持等のかかる費用は市の補助金、チャリティー基金、自主事業（本などの製品販売)、企業（バイエル社など）からの援助で賄っている。
・レーヴァークーゼン市からは 5 人のスタッフが来ていて、庭の手入れなどをしている。
・マネジメントのスタッフは基金から来ている。毎年、援助してくれる団体が変わるので、常に援助してくれる人・企業を探している。

◇NaturGut Ophoven 環境学習センター導入部（左側に施設が配置されている）

◇自然保存・自然体験エリア

## ⑤ アーヘン

郡独立市。人口 241,683 人（2013 年）、面積 160.83k ㎡、人口密度 1,503 人/km²。ドイツ・ベルギー・オランダの 3 カ国に囲まれた地理的条件によって、歴史あるこの街の独特な雰囲気を作っている。

市民のうち学生数は 4 万人（住民の 6 人に 1 人の割合）を数え、146 カ国から集まっている。そのためアーヘンは若くて勢いのある国際都市となっている。

アーヘン工科大学新キャンパス計画図
（出典：rha reicher haase＋associierte 資料）

世界各国から学者や研究者が集まることから、これまでに産学連携が着実に推進されてきた。アーヘン工科大学には、今後数年間で、約 80 万㎡の敷地に 19 の研究クラスターを段階的に形成し、事務棟や実験室を設け、1 万人を超えるスタッフを雇用する新キャンパスの整備が進んでいる。

新キャンパスには国内外から 250 の企業が入居できる。入居企業は大学研究室との個々の協力のみならず、アーヘン工科大学の研究・継続教育活動に長期的に参画できる。このような新しい形態の協力関係により、研究テーマの実用性が増し、さらにリソースを共同利用することでシナジー効果を生み出せる。新設のキャンパスから、現在のアイディアをもとに未来の製品誕生が期待されている。

アーヘン工科大学新キャンパスの様子

### ⑥ エッセン

人口は約 57 万人、人口密度 2,710 人/km²、面積 210.32 km²。東にはボーフム、西にはミュールハイム・アン・デア・ルール、北にはゲルゼンキルヒェンと隣接する。これらの市は、いずれもかつてルール工業地帯として鉄と石炭工業によって繁栄した都市である。

2010 年の欧州文化首都に選ばれるなど、生活の質が高い都市としても知られ、市内には身近な余暇空間として数多くの公園、ゴルフコース、自然保護地域、森及び湖が存在し、余暇空間が市の半分近くの面積を占めている。

ルール工業地帯の石炭・鉄鋼に代わって、文化がエッセン市の新しい活力の源となっている。炭鉱や工場の跡地は創作活動拠点に姿を変え、工場の建物はミュージカルシアター、イベントホール、または音楽学校に様変わりしている。

エッセン市の強みは特に情報通信、環境、水利技術及び教育産業にある。またエッセン市は「医療・健康都市」でもある。医療・健康産業には約 4 万人が従事している。

工業都市としてのエッセンの歩みは、1811 年にフリードリッヒ・クルップが鋳鋼工場を設置したことに始まる。エッセンの人口は工業化で増加し、ルール工業地帯の中心となり、同時にライン・ルール大都市圏の核のひとつとなった。特にエッセンは繁栄を極めた鉄鋼業の財閥クルップ家の本拠地として、ルール工業地帯を牽引した。人口は 19 世紀末の 1896 年に 10 万人を超え、その後も周辺町村を合併して成長し、1962 年には 749,193 人に達した。しかし、その後は産業構造の転換もあり人口が減少している。

ルール工業地帯最盛期の産業遺産として、市北部にツォルフェアアイン炭鉱業遺産群（第 12 立坑、コークス工場などの鉱業関連建造物群）が存在し、ユネスコ世界遺産に登録されている。2010 年の欧州文化首都に選ばれた背景には、この炭鉱業遺産群の存在が大きいとされる。同じくルール工業地帯の施設が残るデュースブルクやドルトムントなどと共に、産業遺産ネットワークとして世界各地から観光客を迎えている。

ツォルフェアアイン炭鉱業遺産群

## ⑦ デュッセルドルフ(ライフサイエンスセンター)

人口は 598,686 人（2013 年)、人口密度 2,756 人/km²、面積 217.21 km²。

ノルト・ライン・ヴェストファーレン州の州都。ライン川河畔に位置し、ライン・ルール大都市圏地域の中心でルール工業地帯のすぐ南西部にある。金融やファッション、世界的な見本市の中心都市の一つ。また西ヨーロッパの中で経済的にも人口的にもとくに発展した地域内に位置している。

デュッセルドルフのライフサイエンスセンター(LSC) は、ハインリッヒ・ハイネ大学のキャンパスに隣接している。

規模： ・利用可能総床面積約 21,000 ㎡
（研究室・オフィス 12,000 ㎡、オフィス棟 9,000 ㎡）
・ 360 台収容の地下駐車場

次の分野で活躍する成熟した企業や新興企業が共に利用できるハイテクセンターとして設計されている。

- バイオ技術／遺伝工学
- バイオ情報科学
- バイオ医学
- バイオ薬剤学
- 医療技術
- ナノ技術
- 生体材料
- 光学技術

ライフサイエンスセンターが市街地の中に溶け込んでいるので施設自体は目立たない

緑豊かな市街地の中に立地するライフサイエンスセンターの施設群

## ⑧ ノイス（ヘルスケアセンター）

ヘルスケアセンター・ノイスは、デュッセルドルフから車で 10 分の距離にあり、ヘルスリサーチ、薬品開発、医薬品や診断などに主眼が置かれ、製薬、バイオ技術、医薬品開発、医療技術、IT、コンサルティング分野の企業が主な対象になっている。研究室とオフィス用のスペースの総床面積は約 16,000 ㎡。

ヘルスケアセンターでは、下記のサービスを提供している。

＜FOCUS Clinical Drug Development GmbH＞

72 床の診療所と、被験者 4,500 名／患者 1,500 名分のデータベースを持ち、臨床研究フェーズ I-III のフルサービス CRO（受託臨床試験）を提供。

FOCUS 社のサービスはフェーズ I-III の試験、開発コンサルティング、臨床薬学、薬物動態試験（PK 試験）／薬力学試験（PD 試験）、データ管理、統計、規制関連業務

＜MCS Micro Carrier Systems GmbH＞

オーダーメードの薬剤・医薬品の開発

ヘルスケアセンターが立地する市街地周辺環境
（ＬＲＴが緑豊かな市街地に見える）

ヘルスケアセンターの入り口

緑に囲まれたヘルスケアセンターの全景

## ⑨ レーヴァークーゼン：バイエル本社・ケムパーク

レーヴァークーゼンは郡独立市であり、化学・製薬会社のバイエル本社がある。

人口は 160,819 人（2013 年）、人口密度 2,040 人/km²、面積 78.85km²。

ケルンとデュッセルドルフ の間には、村が点在するだけだったが、これらの村が 1930 年に合併してレーヴァークーゼン市になった。

バイエル本社・ケムパークの様子

### （4）普天間飛行場跡地利用へ適用すべき事項の整理

前項までの調査結果を踏まえ、普天間飛行場跡地利用へ適用すべき事項を整理した。

表Ⅴ-3 普天間飛行場跡地利用へ適用すべき事項

| 訪問地 | 概要 | 普天間飛行場跡地利用における適用 |
|---|---|---|
| ① ソフィア・アンティポリス | 《開発コンセプトや考え方の基本》<br>・ソフィアはギリシャ神話の「叡智」を象徴する神で、アンティポリスは反都市（中心を持たないまち）という意味で、開発理念をネーミングに込めている。<br>・市場性に基づいて開発計画を実施するのが一般的だが、ここでは「南仏地域に最新の技術を持ち込む必要がある」という理念を先行して実施。<br>・コンセプトに基づき、開発を先行させ、道路や公共交通などのインフラは需要に応じて後から整備する。<br>《開発戦略》<br>・初期段階では、複合多機能（ミクスドユース）を想定していなかったが、開発を進めるうちに職住近接が重要であることに気づき、住機能等を導入。<br>・5 つの地方自治体にまたがる区域であり、自治体が連携して開発や土地利用促進を行うために財団を設立、事業を推進。<br>・サイエンスパークは、常に世界を相手に技術の最先端を担うことが重要で、進化し続ける。 | ・明確なコンセプト（ストーリー）を持って計画を策定し、推進していくことが重要。<br>・研究機関のみならず、企業や住民などの多様な主体が連携できる持続性の高い街づくりのためには、複合多機能（ミクスドユース）な土地利用が重要。<br>・緑地に囲まれた環境づくりのため、敷地の一定割合を緑地とする義務を開発者に課すことや建物のデザインコードにより統一的な街並み景観づくりを行い、街の価値を引き上げることが重要。 |
| ② ルーバン・ラ・ヌーブ | 《都市開発の原則》<br>1. 都市をヒューマンスケールに（小さく）する。<br>⇒自動車中心ではなく人が中心<br>2. 街の中に大学を包含する。<br>3. 大学が都市の成長のためのエンジンとしての役割を果たす。<br>4. 歩行者を最優先に考えた都市とする<br>⇒実際に特徴的な歩道が都市の中に作られている。 | ・複合多機能（ミクスドユース）により住む場所と働く場所を一緒に造り、地域経済の発展と都市的環境を実現していくことが重要。<br>・土地利用や企業誘致を実現するため、一元的に推進できる強力な組織が必要。 |

| 訪問地 | 概要 | 普天間飛行場跡地利用における適用 |
|---|---|---|
| ② ルーバン・ラ・ヌーブ（前頁続き） | 5. 最初から、都市的雰囲気を持った都市とする。<br>6. 柔軟性のある都市デザインとする。<br>7. 都市の中心を人間の環境とする。<br>8. さまざまな人が出会う・交わる場所とする。<br>9. 都市を周辺の環境の中に統合する。<br>**《都市の運営スキーム等》**<br>・大学の学長と市長の 2 人が両輪となって事業を推進。<br>・企業等がここに建築する際には、基準に合うかどうかの審査を大学が行ったうえで、市が最終的に許可を出す。（大学が開発や立地企業の選定に対し、相当大きな権限を保有している。） | ・企業投資の一定割合を文化・芸術へあてる仕組み等により、街なかへのアート作品を展示するなど、有能な研究者や科学者を集めるための魅力ある高質な環境を提供することが重要。 |
| ③ リエージュ大学・ライフサイエンスラボ | **《リエージュ大学とサイエンスパークの取り組み》**<br>・リエージュ大学は、1817 年に設立された歴史の古い大学であり、大学教授、多くの技術が集まっている。<br>・サイエンスパークは単独では成立せず、大学との連携が必要である。<br>・政府が 700ha の土地を提供し、様々な機関が連携する環境が整っている。<br>・研究施設だけでなく、企業にとって魅力的な場所である必要があり、文化・芸術の施設も整備している。<br>・当初は小規模な研究チームから始まったが、成果を上げて徐々に大きくなれば、より大きな土地や建物での研究開発にステップアップしていく。<br>**《農業生物の事業》**<br>・炭素ゼロ、廃棄物ゼロ、エネルギーゼロ、知識の乏しい人材ゼロという 4 つの目標を掲げて、事業を実施。<br>・例えば、排熱温水を用いて熱帯植物を地産地消できるようにしてコストダウンを図る等、再生可能な地域資源と先端産業を組み合わせる等の工夫を行っている。 | ・地域特性を踏まえたテーマを持った産業の誘致を行い、地区との差別化を図ることが重要。<br>・サイエンスパーク整備には地元の研究者グループがリーダーシップを取り、国内外の有能な研究者と強固なネットワークを構築することが重要。<br>・大企業の誘致のみならず、まずは、特色ある中小業を誘致することにより、フットワークのよい研究開発を実施し、実用化等の結果を具現化していくことが重要。 |

| 訪問地 | 概要 | 普天間飛行場跡地利用における適用 |
|---|---|---|
| ④ ボーフム・メディカルクラスター | ・トップのマネジメント、建築と計画、技術と科学の機能化の３組織によって構成されている。<br>・企業を誘致するのに十分なスペースがあるだけでは、企業は立地しているわけではなく、ネットワークを求めて企業は立地している。<br>・メディカルキャンパスは、有力な企業に地区のポテンシャルを紹介し、技術的なネットワークを繋ぎ、誘致する役割を持つ、ソフト的な役割である。<br>・一方、インフラ等のハードの基盤を整備するのは EGR という政府が 100%出資している開発会社が実施する。<br>《メディカルクラスターの立地優位性》<br>・交通の便が良いことと都市の中心部に近いという 2 つの大きな利点の他、エネルギー効率を上げるセンターや文化・芸術系の施設もある。都市的な活動ができることが重要。 | ・リサーチパークを早期に成功へ導くには、誘致したい企業(例えば、業界のトップランナー企業等)へ積極的にアプローチすることが重要。<br>・豊かな環境の中で、価値の高い研究者や従業者のための住宅施設が近接していることが重要。<br>・なお、ハイヤー博士はドイツの多くの軍事基地の跡地の利活用のプロジェクトを行ってきており、基地跡地利用のケーススタディとして、事例を紹介してもらうことは、今後は有益と思慮。 |

# 第Ⅵ章　今後の課題及び検討事項

# 第Ⅵ章　今後の課題及び検討事項

## 1.　今後の課題

本調査においては、「行程計画」における各分野の計画内容の具体化として、特に環境づくりの方針に関する自然環境資源の保全・活用に向けた取組みや歴史・文化資源の保全活用に向けた取組みに関して有識者検討会議を設置し、具体的かつ詳細な内容について検討を実施し、土地利用や都市基盤整備への反映事項の抽出を行った。

また、土地利用、機能導入に関しても、同様に有識者検討部会を設置し、自然環境や歴史・文化資源における検討部会の意見を踏まえながら、各拠点ゾーンに関する配置等の検討及び想定土地利用フレームの整理を行った。

一方で、普天間飛行場の跡地利用計画の検討における重要な条件となる広域幹線道路や鉄軌道、広域緑地、普天間公園（仮称）等に関する都市基盤整備の方針に関しては、当調査と並行し、別途検討が進められており、本調査においてはこれら関連する都市基盤関連の最新の検討状況については反映が出来ていない。

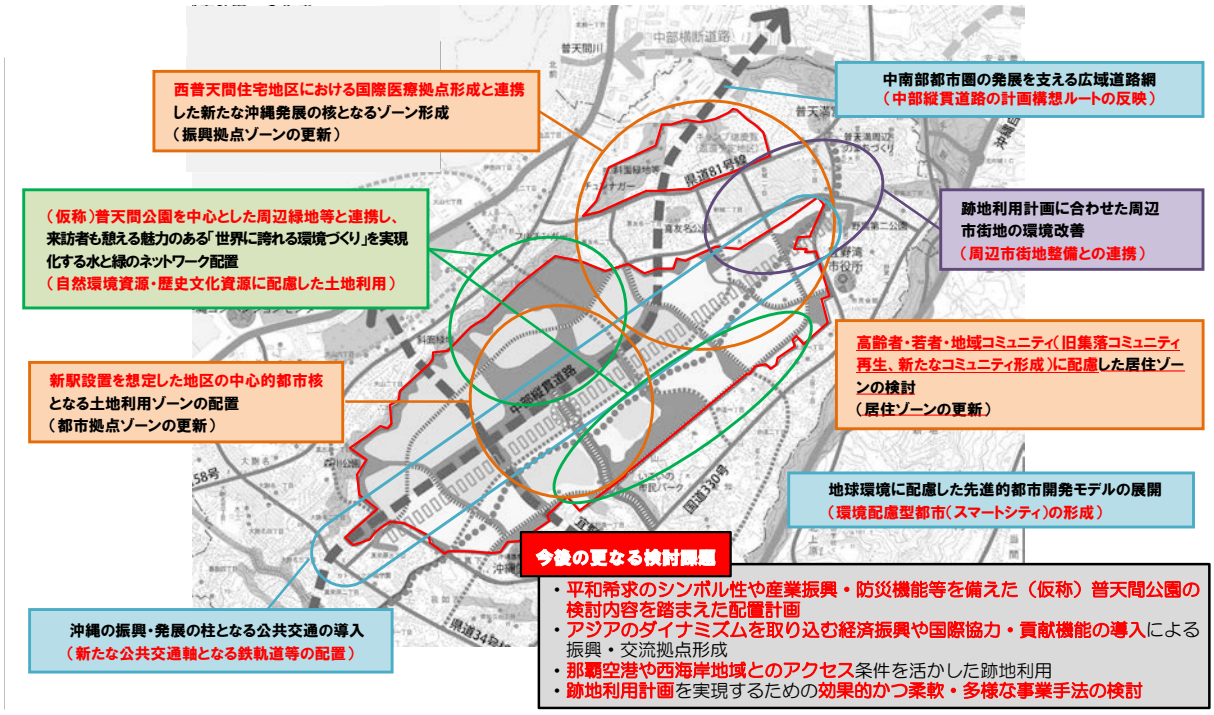
また、これらの都市基盤整備とも関連性がある周辺市街地の整備については現状の整理に留まっている。

これらの状況から、平成 28 年度中の策定が予定されている配置方針図の更新（事務局案）の策定に向けては、別途進められている都市基盤整備の方針に関する検討結果を踏まえ、反映事項について更新を行う必要がある。

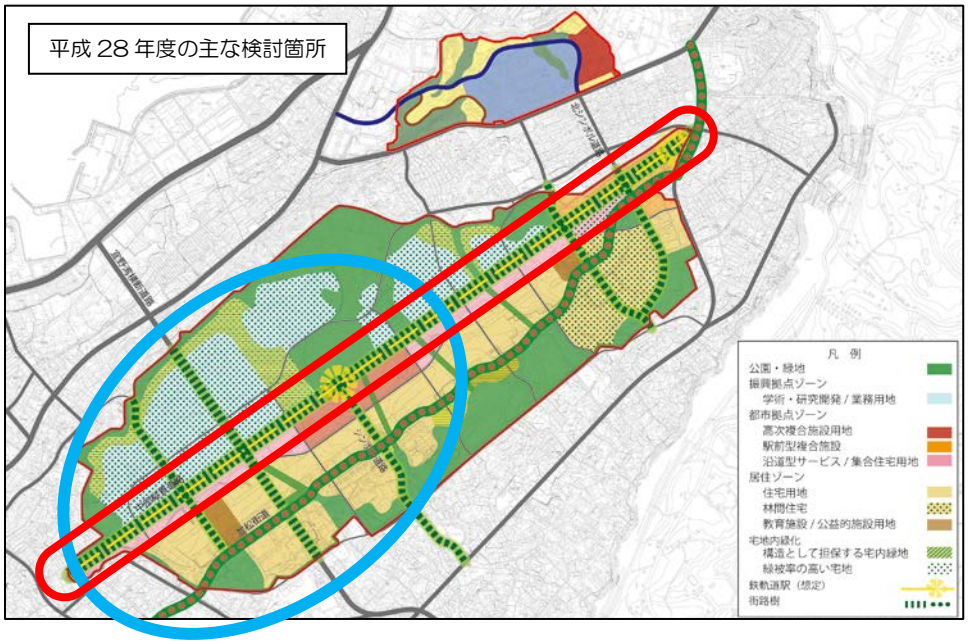
なお、これら検討の実施にあたっては、本調査期間中に実施した「有識者検討会議」、「普天間飛行場跡地利用計画策定全体会議」を引き続き実施し、各種関連計画などとも確実に整合を図りながら、実現性のある検討を実施する事とする。

（今後の主な検討事項）

- 平和希求のシンボル性や産業振興・防災機能を備えた（仮称）普天間公園を中心とした周辺緑地との連携、世界に誇れる環境づくりを実現する水と緑のネットワーク配置
- アジアのダイナミズムを取り込む経済振興や国際協力・貢献機能の導入による振興や交流拠点の形成
- 西普天間住宅地区における国際医療拠点との連携に関する検討、調整
- 沖縄の振興、発展の柱となる新たな公共交通軸となる鉄軌道の配置状況を踏まえた土地利用・機能導入の検討と各拠点ゾーンの更新検討
- 中南部都市圏の発展を支える中部縦貫道路の計画想定ルートを踏まえた地利用・機能導入の検討と各拠点ゾーンの更新検討
- 跡地利用計画に合わせた周辺市街地との連携に関する検討




図Ⅵ-1 配置方針図の更新検討図




図Ⅵ-2 平成 28 年度の主な検討イメージ